

靖國神社年越し詣で

平成25年暮れの大晦日から26年元旦にかけて、恒例の靖國神社年越し詣でを行った。平成25年も、我が日本列島は、50年に一度というような異常気象による大型台風の来襲、極地豪雨、土

砂崩れ、竜巻等の大災害が多く、異常高温にも悩まされた。東日本大震災と福島第一原発事故による災害復興は2年9ヵ月余を経てなお遅々として進まず、アベノミクスによる経済再生への兆しは見えるものの、未だ庶民の実感としては現れておらず、安倍晋三内閣

の奮闘努力によってもなお、政治の混迷は続いており、そこに付け込んだ、中国の軍備拡張と度重なる尖閣諸島領域侵犯、一方的な防空識別圏の設定、竹島・北方四島の実効支配の強化、執拗な中韓両国の歴史認識の捏造、北朝鮮の核・ミサイル発射の危険等国内外

予て念願の靖國神社昇殿参拝を行い、安倍内閣発足後1年、日本再生のための経済・財政政策を軌道に乗せ、日本の安全保障と防衛計画の策定、米軍普天間飛行場移設問題の進展等を機に、日本の未来の発展を願って散華した英霊の御前に「政権が発足して1年の安



元旦午前零時の靖國神社拝殿前



年越し詣での人波第一波（神門開扉直後）



靖國神社奉納大絵馬

の鬱屈した情勢の中で推移したが、秋から暮れに至って漸く状況が上向いてきた感がある。2020年オリンピック・パラリンピックの東京開催決定、伊勢神宮第62回式年遷宮による常若の国再生への希望、財政経済の好転、防衛大綱の策定等々である。

更に暮れの12月26日、安倍総理は、

報 特 攻

平成26年2月

第99号

公益財団法人 特攻隊戦没者慰霊顕彰会

〒102-0073 東京都千代田区九段北3-1-1靖國神社遊就館内・地階

電話 03 (5213) 4594
FAX 03 (5213) 4596

<http://www.tokkotai.or.jp>
振替口座 00140-6-59580

編集人 飯田正能
発行人 羽淵徹也
印刷所 ヨシダ印刷株式会社

目次

靖國神社年越し詣で	14
皇居参賀二題	5
平成26年宮中歌会始の御儀	8
平成25年度「第45回旧海軍航空隊中隊基地出撃戦没者追悼式」に参列して	9
旧海軍航空隊中隊基地出撃戦没者追悼式に参列して	12
千葉県旭市戦没者追悼式に参列して	13
旧海軍航空隊中隊基地出撃戦没者追悼式に参列して	13
大東亜戦争没全学徒慰霊祭	14

埼玉県護国神社「特攻勇士之像」建立除幕式に参列して	18
「特攻勇士之像」建立除幕式に参列して	19
平成25年度「天烈士並びに回天搭載戦没潜水艦乗員追悼式」に参列して	20
回天烈士並びに回天搭載戦没潜水艦乗員追悼式に参列して	20
大阪護国神社「特攻勇士慰霊祭」に参列して	20
特攻コラム「その四」	20
桶川飛行学校跡見学研修会報告	20
新刊「民族史上最大の危機」	20
管見・民族史上最大の危機	20
靖國神社「特攻」第100号記念特集等について	20
靖國彩管奉仕会の略歴	20
平成25年度理事会及び評議員会の実施報告等	20
世田谷山観音寺「特攻平和観音月例法要」の策	20
事務局からの報告等	20



神門前 庭燎奉仕のボーイスカウト



全国神社奉納絵馬展



奉獻酒銘柄展

倍政権の歩みをご報告し、再び戦争の惨禍によって人々が苦しむことのない時代を築くとの誓い、決意をお伝えするため、この日を選んでお参りした」と述べ、また「恒久平和への誓い」と題した首相談話も、日本語と英語で発表した。正に念願の快挙であった。

これに対して早速、中国及び韓国は強く反発し、謂れなき非難・抗議の声明を発表した。

明くれば平成26年、甲午の年、十二支に当てはめて、60年に一度廻ってくる還暦であるが、歴史を緋いてみると、60年前の甲午の年は昭和29年、自衛隊創設の年である。昭和25年6月

25日、北朝鮮（朝鮮民主主義人民共和国）軍は、冷戦下のソ連の支援を得て38度線を突破、怒濤の勢いで韓国に侵攻したことをきっかけとして、朝鮮戦争が勃発した。米国を中心に英国やオーストラリアなどの「国連軍」が支援する韓国軍と、ソ連の後押しを受けて、中共も百万の援軍を送り込んだ北朝鮮軍との戦いは、米ソの代理戦争となった。このとき朝鮮半島南部まで追い詰められた韓国軍を援助する中核であった。日本に駐留する米軍であった。朝鮮戦争への米軍投入に伴う日本の治安維持の低下を懸念したマツカーサーによって、自衛隊の前身とな

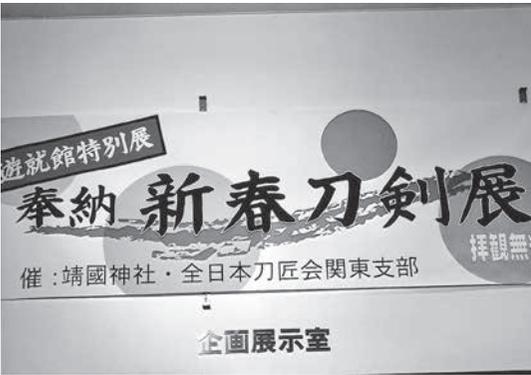
る警察予備隊が創設され、旧海軍の残存部隊は海上保安庁の海上警備隊を経て、独立して警備隊と名称を変えた。昭和26（1951）年、日本はサンフランシスコ講和条約に署名し、主権国家として国際社会に復帰するとともに、日米安全保障条約を締結した。これは朝鮮戦争への対処から、日本が米軍の基地使用を認める一方、米国は外部からの武力攻撃に対する日本国の安全に寄与するとの内容のものであったが、これは昭和35（1960）年の安保改定により、防衛の義務が明確化された。朝鮮戦争は昭和28（1953）年に休戦協定が結ばれたが、米ソの対

立は先鋭化して、米国は日本の再軍備を要求するようになった。日本政府は憲法第9条を盾として再軍備を拒んだものの、日本の防衛力を漸増する方針を決定し、日米相互防衛援助（MSA）協定が結ばれて、米国は日本に武器などの援助をスタートさせた。こうして、警察予備隊が、保安隊を経て昭和29（1954）年に陸上自衛隊となり、警備隊は、海上自衛隊と改組された。領空警備を担う航空自衛隊も創設され、同時に、自衛隊を管理・運営するために、総理府の外局として防衛庁（現在の防衛省）も設置された。

60年前の甲午年は、正に我が国の安全保障と防衛の節目の年であったのである。更にその60年前の甲午年は、明治27（1894）年、日清戦争勃発の年である。日清戦争の原因については諸説あるが、明治初年以來日本が対朝鮮李王朝に対して求め続けてきた、中国（清国）への朝貢体制から脱却して独立し、開明化を図ることで、朝鮮半島の安定化、引いて我が国の安全を図ろうとしたのに対し、清国はこれに逆ず、旧属国体制を維持しようとし、更にその裏に英露他の干渉、植民地化への野望が渦巻いていたからである。明治4年の台湾蕃社による琉球漁民殺害事件に端を発した同7年の台湾征討



元旦0時30分頃の遊就館内



靖國神社遊就館特別展

軍の派遣、同8年の琉球王朝に対する清国への隔年進貢、慶賀使節差遣、冊封使受け入れ等の禁止、同12年の琉球王尚泰に対するいわゆる琉球処分、これに対する清国の猛反発と軍備拡張、朝鮮国内における保守派と開明派の激しい対立、その機に乗じたイギリス海軍の朝鮮海峡にある巨文島占領、清仏戦争の勃発、更にはロシアの半島進出等、欧州列強による植民地化の危機が相次いだ。

明治28年の日清講和(下関)条約の第1条に「清国ハ朝鮮国ノ、完全無欠ナル独立自主ノ国タルコトヲ確認ス。因テ右独立自主ヲ損害スヘキ、朝鮮国

ヨリ清国ニ対スル貢献、典礼等ハ将来全ク之ヲ廃止スヘシ」とあるように、朝鮮の独立が確認されている。

日清戦争は、明治日本が初めて経験した対外戦争であった。しかも相手は老いたりとはいへ、人口・版図とも我が国の10倍以上の超大国の清である。国民は不安に戦きながらも維新で築いたばかりの新生国家の命運を賭して、上・官民心を一つにして国難に当たった。その結果は、日本の大勝利となり、台湾・澎湖島及び遼東半島の割譲等、版図の拡大、賠償金の獲得となった。顧みて、現下の我が国の領域周辺の状況、特に中韓の反日運動、両国の接

近、北朝鮮問題等120年前の国内外の情勢を彷彿とさせる。先人に学ぶべき点、我が国の自存自衛と伝統の保持について真剣に考える甲午の年でなければならぬ。この度の年越し詣では取り分け、その思いに駆られつつ家を出た。

靖國神社ほど参詣者を手厚く遇して下さる神社はないのではないかと。特に年越し詣でに当たっては、寒さを凌ぐための種々の配慮がなされている。境内各所での、ボイスカウト東京連盟の大勢の少年・少女達による庭燎(かがり火)奉仕、社頭における御神酒の振舞い、遊就館前における熱い甘酒の接待、終夜開館されている遊就館、参

集殿内でのお茶の接待等々。勿論、外苑参道の両側には沢山の屋台が立ち並び、参詣者が一時の暖を取り、腹拵えをするには事欠かない。若者や家族連れにとつては楽しい年越し詣である。日本人の古里がそこにはある。そして、内苑に進み身を清めて神前に頭を垂れば、我々の先祖や先輩、同僚の御霊が手厚く祀られている。国のため命を捧げた人々の英魂が、身分の如何を問わず鄭重に祀られているのである。

地下鉄九段下駅を出て坂を登れば、やがて大鳥居が漆黒の空に、ライトを受けて巨人の如く聳え立つ。これより第二鳥居までの参道両側には、沢山の

屋台が並び、食べ物の臭いや参詣者のさんざめきに包まれ、いずこも同じ年越し詣での景観である。だが、ここまでは外苑、下乗札の立つ内苑神域に入れば、凜とした空気に包まれ、数百の参詣者が静かに開門を待つ。圧倒的に若者が多く、筆者のような高齢者の姿はほとんど見当たらない。外国人の姿もかなり多い。歴史と伝統のある日本人の風習が、そして日本人の美しい心が、外国人の目にはどのように映っているのであろうか。

閉ざされた神門中央扉の十六重弁菊の大御紋章がライトを受けて金色に輝き、大鳳と大羽子板が左右の柱に飾られて、新しい年への門出を祝するかのようである。大手水舎の前で庭燎(かがり火)奉仕をするボイスカウトの少年達の姿も凛々しく映える。

やがて零時30分前、一斉に開扉されると、ライトアップされた正面の拝殿が神々しく目に飛び込んでくる。一同肅々と拝殿前の鳥居付近まで進む。この日、大晦日の夜は風も凪いで絶好の日和、漆黒の空を背景に拝殿の甍が聳え立ち、金色の御紋章がライトに映えて輝き、見事なコントラストをなしている。更にまた今日の拝殿は特別に紫の幔幕を廻らし、白く染め抜かれた十六重弁菊の大御紋章が目に見えやかである。

正零時、暗夜の静寂を破って拝殿の大太鼓が鳴り響くと、一斉に「明けましておめでとうございます」と互いに挨拶を交わして拝殿に進み、柏手を打ち、深く低頭して御霊に感謝の誠を捧げる。若者達を中心ではあるが、真摯な参詣者の姿がそこにある。

新年拝殿掲示の天皇陛下の御製は、「白樺の堅きつばみのそよ風に

揺るるを見つつ新年思ふ」と

あり、平成4年の歌会始の御題「風」を詠まれたものである。天皇陛下の御製には深い祈りや慈しみの御心が込められており、霊性とも霊力とも言うべき不思議な力、人々の心に深い感動を与える力を持っている。

「思ひ出ず靖國の御前に顔づけば

戦場に出でし義兄らの面影」

(正能) 私事

ながら小生の姉と妹の夫(共に故人)の兄たちは、若くして学徒出陣し、姉の方はニューギニア戦線で、妹の方は広島原爆で何れも戦死し、靖國神社に祀られている。また、妻の叔父もシベリア抑留中に病死して同じく靖國神社に合祀されている。

拝殿の右側には例年の如く伊勢絵馬協賛会から献上された大絵馬が掲げられている。今年も甲午の年、干支の馬に因み、伊勢神宮の神馬・白馬の絵が

描かれた見事なものである。

また、参集殿の前には、全国約三百三十余社の神宮・神社から奉納された絵馬が美しく飾られており、その中に懐かしい郷里の氏神様の絵馬を発売して感無量。また、全国靖國献酒会から奉納された三百余種の銘酒とそのラベルが飾られている。靖國神社に寄せる全国の神宮・神社の神官・神職及び神酒を醸造する杜氏達並びに善良な国民の崇敬心の篤さを思わせる。

更に、境内各所で、庭燎奉仕をするボーイスカウト東京連盟の大勢の少女達や受付案内の事務奉仕をする崇敬奉賛会青年部「あさなぎ」の若者達の健全な姿に感動。このような日本人の心を受け継ぐ青少年のいる限り、未来への展望が開けるような気がする。

参拝を終え、神社心尽くしの甘酒で一息ついた後、夜通し開館されている遊就館で、特別展「奉納新春刀剣展」を拝観する。平成25年2月第94号のこの欄にも記載させていただいたが、この刀剣展に関連して、次の記事を再度掲載させていただくことにする。

刀剣、なかんずく日本刀は、古来武士の魂とされ、武器としては勿論であるが、破邪の利剣とも言われて、正義、顕正の象徴とされ、神器としても尊崇されてきた。三種の神器の一つである

天叢雲劍(後に草薙劍)は、その

最たるものである。また、鎌倉時代の初め、後鳥羽院(上皇)(天皇御在位第82代一一八三―一一九八年、上皇御院政一一八八―一二二一年)が各地の刀鍛冶の名工25名を召されて仙洞御所で太刀を打たせられ、御自らも倅刃(刀身に刀紋を付ける工程)を試みられ、完成した太刀の茎に十六重弁菊花紋を銘に代えて刻まれたこと、そして後に、この菊花紋が皇室(天皇家)の御紋章となったこと、また、後鳥羽院の作刀は「菊の御作」として今に伝えられていることは、周知のとおりであろう。

ところで、靖國神社の境内にも、かつては多くの刀匠を抱え、「靖國刀」と呼ばれる日本刀を鍛造する日本刀鍛錬會の鍛錬場があったことは余り知られていないので、境内奥の相撲場の南にある「行雲亭」(今は茶室に改造されている)の銘板からその由来を抜粋すると、次のとおりである。

「行雲亭は、陸軍省の建築課技師内藤太郎と柳井平八の設計により、昭和八年六月二十五日(財)日本刀鍛錬會の鍛錬所として竣工された建物である。昭和六十二年九月に五つの鍛冶場の全てが茶室に改装されたが、外観は当時のままの優美な姿を残しており、特に屋根上の吹抜けは、鍛錬場にみられる

様式で、行雲亭本来の姿を物語っている。(財)日本刀鍛錬會は、明治維新

とともに衰退の一途をたどった鍛冶界の復興、国民の愛刀心の向上、そして有事に際した軍刀の整備などを目的に発会。理事長には歴代の陸軍次官があたり、延べ十一名の刀匠と二十一名の先手からなる刀工集団を中心に組織され、終戦までの間、八一〇〇振に及ぶ良質な日本刀を製作し続けた。そこで製作された日本刀は「靖國刀」、刀匠達は「靖國刀匠」と呼ばれ、当初の靖廣・靖徳・靖光をはじめ、陸軍大臣より「靖」の字を冠する匠銘を授与された。また、大正十五年頃には、日本古来のたたら製鉄は途絶え、日本刀の材料となる高品質の玉鋼の入手は困難な状態にあった。そこで、日本刀鍛錬會は、古代から良質の砂鉄を産出する島根県仁多郡横田町に「靖國鑪」を開設し、そこで生産された玉鋼は五十数トンに及んだ。

終戦を迎え、日本刀の製作は一時禁止されたが、昭和二十八年には再開。また、中断していた鑪操業も、昭和五十二年には、靖國鑪の技術を継承し作刀技術の保存を目的とする(財)日本美術刀剣保存協会が「日刀保たたら」として復活させた。そこで生産された良質な玉鋼は、日本刀の材料としてだ

けでなく、茶の湯の釜や東大寺仁王像修復などにも広く用いられている。」

(飯田正能記)

皇居参賀二題

例年のとおり、暮れと正月、二度の参賀に皇居を訪れた。12月23日の天皇誕生日と1月2日の一般参賀である。いずれも好天に恵まれて多くの人々が訪れた。

○天皇誕生日参賀

天皇陛下は平成25年12月23日、満80歳(傘寿)の御誕生日を迎えられた。誠に慶賀に堪えないところであり、心より聖寿万歳を祈念申し上げる。

陛下は、現憲法下で初めて即位された天皇として常に、象徴天皇の在り方を模索してこられ、国と国民のために尽くすことが天皇の務めであるとして、国民と苦楽を共にすることを実践してこられた。平成元(1989)年

1月9日の「即位後朝見の儀」において、「皆さんとともに日本国憲法を守り、これに従って責務を果たすことを誓い、国運の一層の進展と世界の平和、人類福祉の増進を切に希望してやみません」と述べられた。また、大きな自然災害の際には、先ず被災した都道府県の知事にお見舞いを伝え、間もない

時期に、現地を訪問されてきた。平成23(2011)年3月11日の東日本大震災の際には、津波による犠牲者が増え続け、福島第一原発事故も重なった未曾有の大災害に、国も国民も大きく動揺している中、同月16日には、ビデオメッセージにより、「被災した人々が決して希望を捨てることなく、明日からの日々を生き抜いてくれるよう、国民一人ひとりが被災した地域に長く心を寄せていくことを心より願っています」と語り掛けられた。被災者をい

の際には、150人の遺族に親しく慰めのお言葉を掛けられ、一同を感動させた。また、天皇、皇后両陛下は、平成6(1994)年2月硫黄島を、戦後60年に当たる平成17(2005)年6月にはサイパン島をそれぞれ御訪問になり、戦没者を慰霊された。更に御公務以外の宮中祭祀、伝統行事等も欠かさず、真摯に務められ、また、御公務の合間には、科学者としてハゼの研究にも熱心に取り組まれ、これまで、31編の論文を発表してこられた。天皇陛下が歩んで来られた80年の道のり、皇后陛下と共に御手を携えて歩んで来られた55年の道のりを振り返り、誠に有り難く、感激の他ない。

に及んだという。若い人や家族連れが多く、特に外国人の多さが目立つ。我が国の皇室に対する敬愛の念は、今や国際的である。しかも、内外を問わず、いずれの人の顔も晴れやかに見える。天候は次第に回復し、時折雲間から日も射し、皇居の緑、それに参賀の人々が手にする日の丸の小旗が映えて美しい。やがて天皇、皇后両陛下を始め皇太子、同妃両殿下、秋篠宮、同妃両殿下の六方が長和殿ペランダにお出ましになると、宮殿前を埋める参賀の人々から一斉に万歳の声が上がりがり、日の丸の小旗が打ち振られる。これにこやかに会釈をされる。皇室と国民を結び付ける最も美しい光景である。

漂う中、このビデオメッセージにより勇気付けられた人は少なくなかった。そして、その後の被災地への両陛下並びに皇族方の御訪問はしばしば行われてきた。

天皇陛下はまた、皇太子時代から戦没者慰霊に御心を砕いてこられた。取り分け沖繩への思いは深く、計9回、沖繩県を訪問してこられた。最初の昭和50(1975)年には、ひめゆりの塔で火炎瓶を投げつけられる事件が起きたが、陛下の誠実な優しいお人柄が沖繩の人々の心を解かし、平成5(1993)年、天皇として初御訪問

でも冷たい風の吹く中を、毎年嘉例により皇居一般参賀(午前中3回お出まし、午後は記帳のみ)に出掛けた。今回は第1回のお出まし(10時10分頃)に間に合うようにと、9時30分正門開扉時刻に合わせて、地下鉄大手町駅から皇居前広場に向かったが、既に検問所前は参賀の人波で一杯であった。今年一般参賀の人員は、昨年を上回り、記帳を含めて2万8945人

陛下は、「・・・喜ばしいこと、心の痛むこと、様々なことのある1年でした」と振り返られ、「大きな台風が伊豆大島を襲い、少なからぬ地方が風水害の被害に苦しみました」と被災者を気遣われた。また、東日本大震災の復興が未だ途上にあることにも触れられ、「私どもはこれからも被災者のことを思いつつ、国民皆の幸せを願って過ごしていくつもりです」と述べら

れた。お言葉の最後には、大勢の参賀者に向けて、「ありがとう」とお辞儀をされ、笑顔で御手を振られた。被災者を思い、国民の幸せを願われる陛下の御心を込められた御言葉には深く感動した。国民と国家の象徴として努められる真に真摯で崇高な御姿である。



参賀を終えて、皇居東御苑を経、北の丸公園を通り、靖國神社へ向かう。この日は、今上陛下のめでたい御誕生日であると同時に、かの忌まわしい極東国際軍事裁判(いわゆる東京裁判)の判決で、いわゆるA級戦犯として絞首刑を言い渡された(昭和23年11月12日)七士の方々(土肥原賢二、松井石根、東條英機、武藤章、板垣征四郎、廣田弘毅、木村兵太郎)が、巢鴨拘留所において処刑された日(昭和23年12月23日午前0時1分と0時20分)から65年目の命日(66回忌)でもある。いわゆる東京裁判は、昭和21年4月29日の昭和天皇御誕生日(天長節)に始まり(起訴)、当時皇太子殿下であられた今上陛下の御誕生日に終結する(処刑)ように仕組まれた。そして天皇のみならず、日本国民に永久に負い目を忘れることのないよう、東京裁判史観による洗脳を工作したのである。靖國

神社参拝を終えて、遊就館前の「ラダ・ビノード・パール博士顕彰碑」に参拝する。この日の顕彰碑には生花が供えられ、大勢の人々、特に若者達が碑前に佇んで熱心に碑文と靖國神社の元宮司故南部利昭氏が捧げた建立の「頌」に見入っていた。この碑文と「頌」は、極東国際軍事裁判の不当性と同裁判所判事としてただ一人、全員無罪を主張したインド代表判事パール博士の崇高な使命感を端的に表していると思われるので、再度揭示する。

「碑文(意見書の結語)

時が熱狂と偏見とをやわらげた暁にはまた理性が虚偽からその仮面を剥ぎとつた暁にはその時こそ正義の女神はその秤を平衡に保ちながら過去の賞罰の多くにそのところを変えらるることを要求するであろう

ラダ・ビノード・パール



パール博士が意見書の結語として示されたこの詩文が、実は、アメリカにおける南北戦争終結後、南軍の捕虜収容所長ワーズ大尉が、北軍の捕虜虐待を命じたとして訴追され、北軍側の偏見に基づく裁判の結果処刑されたのを

悼み、その処刑後43年を経て建立された記念碑の台座に刻まれた、時のデービス大統領が、ワーズ大尉の冤罪を晴らすために書いた彼への鎮魂歌であることを、吉本貞昭(本名中川聖氏)著『東京裁判を批判したマッカーサー元帥の謎と真実』(平成25年5月株ハート出版発行)によって初めて知ることができた。



「頌

ラダ・ビノード・パール博士は、昭和二十一(一九四六)年五月東京に開設された「極東国際軍事裁判所」法廷のインド代表判事として着任され、昭和二十三年十一月の結審・判決に至るまで、他事一切を顧みることなく専心この裁判に關する膨大な史料の調査と分析に没頭されました。

博士はこの裁判を擔當した連合國十箇國の裁判官の中で唯一人の國際法専門の判事であると同時に、法の正義を守らんとする熱烈な使命感と、高度の文

明史の見識の持主でありました。博士はこの通称『東京裁判』が、勝利に傲る連合國の、今や無力となった敗戦國日本に對する野蛮な復讐の儀式に過ぎない事を看破し、事實誤認に満ちた連合國の訴追には法的根拠が全く缺けていた事を論証し、被告團に對し無

罪と判決する浩翰な意見書を公にされたのであります。その意見書の結語にある如く、大多数連合國の復讐熱と史的偏見が漸く収まりつつある現在、博士の裁定は今や文明世界の國際法學界に於ける定説と認められたのです。私共は茲に法の正義と歴史の道理とを守り抜いたパール博士の勇氣と情熱を顕彰し、その言葉を日本國民に向けられた貴重な遺訓として銘記するためにこの碑を建立し、博士の偉業を千古に傳へんとするものであります。平成十七年六月二十五日

靖國神社 宮司 南部利昭



天皇陛下は、新年を迎えるに当たつての御感想を文書で発表された。

御感想は「東日本大震災から3度目の冬が巡ってきましたが」に始まり、放射能汚染のため故郷に戻れなかったり、仮設住宅で生活を続けたりしている被災者について「改めて深く案じられます」との思いが寄せられている。

そして、新しい年にあたり、「国民皆が苦しい人々の荷を少しでも分かち持つ気持ちを見失わず、世界の人々とも相携え、平和を求め、良き未来を築くために力を尽くしていくよう願っています」と綴られた。

天皇、皇后両陛下は、昨年10月に土石流災害を受けた伊豆大島へのお見舞いを希望しておられ、今年2月にも現地入りされる。また、昨年10月に第62回式年遷宮・遷御祭が斎行された伊勢神宮への御参拝も予定されている。そのほか、恒例の行事としては、5月、6月に全国植樹祭のため新潟県を、10月に国体のため長崎県を、11月頃に全国豊かな海づくり大会のため奈良県を御訪問の予定である。

皇后陛下も、10月には満80歳の傘寿をお迎えになる。

◇ ○天皇、皇后両陛下が平成25年にお詠みになられた御歌(宮内庁発表)

天皇陛下御製(5首)

〈あんずの里〉

赤き蓼の反りつつ咲ける白き花の

あんず愛でつつ妹と歩みぬ

〈大山ロイヤルホテルにて〉

大山を果たてに望む窓近く

体かはしつづいはつばめ飛ぶ

〈水俣を訪れて〉

患ひの元知れずして病みをりし

人らの苦しみをかばかりなりし

〈皇居にて二首〉

年毎に東京の空暖かく

紅葉赤く暮れに残れり

被災地の冬の暮らしはいかならむ

陽の暖かき東京にあて

皇后陛下御歌(3首)

〈打ち水〉

花槐花なき枝葉そよぎいで

水打ちし庭に風立ち來たる

〈遠野〉

何処にか流れのあらむ尋ね來し

遠野静かに水の音する

〈演奏会〉

左手なるピアノの音色耳朶にありて

灯ともしそめし町を帰りぬ

◇ ○新年一般参賀

大晦日以来三日続きの晴天、一点の曇りもない日本晴れ、正に参賀日和である。1月2日は筆者の誕生日でもあつて、家族共々朝早めの祝い膳を頂いて家を出た。

新年参賀はさすがに規模が大きい、宮殿長和殿ベランダへの天皇・皇后両陛下始め皇族方の御出御は、午前3回(10時10分頃、11時頃、11時50分頃)午後2回(1時30分頃、2時20分頃)計5回行われる予定であるが、通常、皇族方の御出御は午前中1〜2回目が一番多い。皇居外苑では、馬場先門、和田倉門、桜田門の三方向から進んできた参賀の人波を各検問所で検査をし

た後、警官の誘導に従い石橋を渡って正門から入り、鉄橋(二重橋)を渡って宮殿長和殿前の広場に至る。いずれも長蛇の列である。早めにと思つて家を出たが、地下鉄駅から検問所まで約20分、検問所から正門石橋前まで約20分、そこから更に広場まで約20分と約1時間を要したため、第1回の御出御(10時10分頃)にようやく間に合った。およそ2万人を収容できるといふ長和殿前の広場は、手に手に日の丸の小旗を持った参賀の人々で忽ち一杯になった。やはり若者が圧倒的に多く、華やかな雰囲気満ちている。外国人も非常に多い。観光ツアーと思われる団体も多い。喜ばしいことである。参賀は日本の伝統文化でもあるからだ。

やがて定刻、天皇・皇后両陛下を先頭に、皇太子・同妃両陛下、秋篠宮・同妃両陛下ほか皇族方が御出御になられると、一斉に日の丸の小旗が打ち振られ、天皇陛下万歳の歓声が上がります。

両陛下と皇族方がお手を振つてこやかに応えられた。この日の皇族方は、皇太子・同妃両陛下、秋篠宮・同妃両陛下、眞子内親王殿下のほか、常陸宮妃華子殿下、三笠宮崇仁親王殿下・同妃百合子殿下、三笠宮寛仁親王妃信子殿下、高円宮妃久子殿下、承子女王殿下、典子女王殿下の12方に両陛下下合

せて14方という、誠に豪華な、華やかだ感じのする御出御であり、皇族方のお健やかな御容姿を拝し、誠に喜ばしい限りであった。取り分け、1回目の参賀には、満98歳と90歳という御皇室最高齢の、三笠宮・同妃両陛下には、共にベランダに進み出られ、盛んに御手を振つて参賀者に応えられた。お元気な御容姿を拝し、誠に喜ばしく感動に胸の熱くなる思いであった。

天皇陛下は、「・・・本年が国民一人びとりにとり、安らかな、穏やかなものであることを願っています。年の初めにあたり、我が国と世界の人々の安寧と幸せを祈ります」とのお言葉を賜った。

過重な御公務の中にあつて絶えず国民の上に思いを寄せられる、誠実で優しい陛下の大御心に感動させられた。今年一般参賀は、昨年12月23日に天皇陛下が満80歳(傘寿)を迎えられたことなどから、その慶賀のためか、参賀者数は、皇太子・同妃両陛下御成婚翌年の平成6(1994)年の約11万人に次ぐ、平成に入つて2番目に多い8万1540人に達したという。身も心も清められ、晴れ晴れとした思いで宮殿前広場を後にした。

(飯田正能記)

○平成26年「宮中歌会始」の御儀

新春恒例の「宮中歌会始」の御儀が1月15日午前、皇居正殿「松の間」において、古式に則り厳かに行われた。今年の勅題は「静」で、天皇、皇后両陛下の御製・御歌、皇族方のお歌、特に招かれた歌を詠む召人の歌と選者の歌、2万1680首の応募作の中から選ばれた選歌10首（今年の最年少は新潟県の新藤正彦さん83歳）が、天皇陛下の御前で披露された。

天皇陛下の御製は、昨年10月、全国豊かな海づくり大会に御出席のため初めて熊本県水俣市を御訪問の折、「水俣病慰霊の碑」に御参拝、供花された際に、御目の前に広がっていた海の情景をお詠みになられたものである。また、皇后陛下は、伊勢神宮の式年遷宮で臨時祭主を務められた御長女の黒田清子様（さやこ）が、昨年9月、両陛下に伊勢への御出発の御挨拶にいられた際の御様子を詠まれたものである。

天皇陛下御製

慰霊碑の先に広がる水俣の
海青くして静かなりけり

皇后陛下御歌

み遷りの近き宮居に仕ふると
暁静かに娘は言ひて発つ

皇太子徳仁親王殿下御歌

宮社の静けき中に聞え来る
歌声ゆかし新嘗の祭

皇太子妃雅子殿下御歌

悲しみも包みこむごとと釜石の
海は静かに水たたへたり

秋篠宮文仁親王殿下御歌

数多なる人ら集ひし遷御の儀
静けさの中御列は進む

秋篠宮妃紀子殿下御歌

いくつものポピンを子らは繰りながら
静かにイドリアレースを編めり

秋篠宮眞子内親王殿下御歌

新雪の降りし英国の朝の道
静けさ響くごとくありけり

常陸宮妃華子殿下御歌

秋祭君の挨拶を聞かむとし
子供神輿の子らは静まる

三笠宮妃百合子殿下御歌

思ひきや白寿の君と共にありて
かくも静けき日々送るとは

三笠宮寛仁親王妃信子殿下御歌

わが君と過ごせし日々を想ひつつ
静かなるるときありがたき

三笠宮彬子女王殿下御歌

夏の夜に子らと集ひし大社
静寂の中に鈴の音聞きぬ

高円宮妃久子殿下御歌

灯籠のあかりともれる回廊を
心静かに我すすみゆく

高円宮承子女王殿下御歌

静けさをやぶる神社の鳥の声
日の落ちてよりいづる三日月

高円宮典子女王殿下御歌

かすみゆく草原に立ち眺むれば
いとど身に沁む静けさのあり

召人 芳賀 徹

子も孫もきそひのほりし泰山木
暮れゆく空に静もりて咲く

選者 岡井 隆

朝霧のながるるかなた静かなる
邦あるらしも行きて住むべく

選者 篠 弘

一瞬の静もありありて夕駅へ
エスカレータは下りに変はる

選者 三枝 昂之

から松の針が零れる並木道
みんな静かな暮しであった

選者 永田 和宏

歳月はその輪郭をあはくする
静かに人は笑みてあるとも

選者 内藤 明

手に載せて穴より覗く瓢箪の
静けき界に心はあそぶ

選者 内藤 明

○選歌（詠進歌10首、年齢順）

愛知県 伊藤 正彦 (83)

いなづまのまたひらめきし静かなる
窓ひとつあり夜ひとりあり

山口県 中西 輝磨 (82)

目の生れし魚の卵をレンズもて
見守る実験室の静けさ

徳島県 藤本 和代 (65)

おほいなる愛のこもれる腎ひとつ
静かに収まる弟の身に

北海道 佐藤眞理子 (64)

プレートよ静かにしづかに今しがた
生まれたひとりが乗らうとしてゐる

群馬県 山口 啓子 (60)

ひとり住む母の暮しの静かなり
父のセーター今日も着てをり

大阪府 前田 直美 (52)

嫁ぐ日の朝に母は賑やかに
父は静かに食卓囲む

福島県 冨塚真紀子 (32)

吾の名をきみが小さく呼捨てて
静かに胸は揺らいでしまふ

東京都 樋口 盛一 (29)

静けさを大事にてきる君となら
何でもできる気がした真夏

東京都 中島 梨那 (20)

二人分焼いてしまった食パンと
静かな朝の濃いコロンビア

新潟県 加藤 光一 (16)

続かない話題と話題のすきまには
君との距離が静かにあった

(飯田正能記)

平成25年度・第45回 旧海軍航空隊串良基地出 撃戦没者追悼式に参列して

評議員 飯田 正能

平成25年10月12日(土) 14時から、鹿兒島県鹿屋市串良平和公園慰霊塔前広場において催行された、同市主催による旧海軍航空隊串良基地出撃戦没者追悼式に当顕彰会代表として参列させていただいた。

鹿兒島県の知覧や萬世など、旧陸軍航空基地の特攻隊戦没者慰霊祭には幾度か参列の機会があったが、旧海軍航空基地の特攻隊戦没者慰霊祭に参列するのは初めてであった。九州には、沖縄特攻作戦を始め、本土防衛作戦等の

ため、30数箇所以上の陸海航空特攻基地があったと言われているが、中でもこの串良基地は、鹿屋に次ぐ大規模な海軍特攻基地として、沖縄特攻作戦では重要な役割を果たした。

串良町は、今では鹿屋市に合併されているが、鹿兒島県大隅半島中部の最もくびれた所に位置し、東は志布志湾(東串良町)、西は鹿兒島(錦江)湾(垂水港)を望む丘陵地帯にあって、風光明媚な田園地帯である。鹿兒島空港から鹿屋バスセンターまで直行バスで1時間40分、鹿屋バスセンターからタクシーで20分、鹿屋市の東外れにある。慰霊祭は、その串良町にある平和公園の戦没者慰霊塔前で催行される。串良町の観光パンフレットによると「串良海軍航空隊は、第2次世界大戦の末期、教育航空隊として開設され、

約5千名の飛行予科練生が航空機の整備・搭乗・通信等の猛訓練を受けたところである。昭和19年4月には実戦部隊に編入され、更に昭和20年3月1日からは特別攻撃隊の基地となり、終戦までの半年間に、祖国の安泰を祈り、身を捨てて南の上空へと勇躍飛び立ち散っていった、若き精鋭達合計570名の最後の地となった場所です。昭和44年10月1日、平和の礎石となられた英霊の慰霊塔が建立され、基地の跡地を利用して植樹された桜並木とともに市民の憩いの場となっています」とある。この広大な跡地を利用した平和公園には、陸上競技場を始め、野球場、テニスコート、ゲートボール場、レジャープール等の体育施設の他、平和アリーナ、イベント広場等も設置されており、市民の憩いの場、各種催し物を楽

しむ場所ともなっている。特に旧滑走路に沿って植えられた約2千本の桜並木は壮観であり、春の桜まつりの賑わいが彷彿とされる。その平和公園の南側入口近くの、かなり広いスペースが、戦没者の慰霊のためのメモリアルゾーンとして整備され、中央の小高い丘の上に、高さ20メートル以上はあるうかと思われる白亜の慰霊塔が聳え立ち、麓の一角には各部隊の慰霊碑が整然と立ち並んでいる。

14時からの式典までには、30分以上の時間があつたので、御遺族と共に、慰霊塔への30数段の石段を上って丘の頂上に立ってみた。石段の左右には、「平和」の文字を象った柘植が満天星の刈り込みがあり、周りの芝生は綺麗に刈り込まれていた。慰霊塔の台座には、串良基地出撃戦没者359柱(姫路空遺族会発行の資料では573柱、前記の串良町観光パンフレットでも570名となっている)の銘板が刻まれており、御遺族の方々は、身内の方の銘板の前に花を手向けて祈りを捧げておられた。銘板の出撃戦没者数は359柱ということであるが、当顕彰会が編纂・発行している『特別攻撃隊全史』(平成20年8月15日発行)掲載の串良基地慰霊塔の「由来記」には、出撃特攻隊数は、合計26隊、136機、



慰霊塔



しむ場所ともなっている。特に旧滑走路に沿って植えられた約2千本の桜並木は壮観であり、春の桜まつりの賑わいが彷彿とされる。その平和公園の南側入口近くの、かなり広いスペースが、戦没者の慰霊のためのメモリアルゾーンとして整備され、中央の小高い丘の上に、高さ20メートル以上はあるうかと思われる白亜の慰霊塔が聳え立ち、麓の一角には各部隊の慰霊碑が整然と立ち並んでいる。



戦没者銘板



戦没者銘板



旧滑走跡の桜並木

戦没者数340名と記載されており、また、同全史の特別攻撃隊戦没者名簿には、320名が登録されている。この戦没者数の違いは、例えば、沖繩特攻戦における、菊水一号作戦に基づく4月6日の出撃部隊が、全史の慰霊塔「由来記」には、菊水部隊天山隊、第三御楯天山隊、第一八幡護皇隊艦攻隊、第一護皇白鷺隊、第二一〇部隊彗星隊の44機、122名の大挙出撃を皮切りに、以後続々と出撃し、沖繩作戦終了の6月25日までに359柱の特攻勇士が沖繩周辺の米軍艦船に突入散華された、となっているが、戦没者名簿では、4月6日の出撃部隊の内、第二一〇部隊彗星隊7機、13名は、第一国分基地から出撃したことになっている。また、現地の戦没者数には、特攻

隊の直掩隊の戦没者、同基地周辺での戦没者や搭乗整備員の戦没者も含まれているのではないかと思われる。なお、世田谷山観音寺境内の特攻観音堂に向かって左後方の木立の陰に、菊水部隊天山隊の慰霊碑「天山隊之碑」が建てられており、その碑文には「大東亜戦争末期昭和二十年四月六日鹿児島申良基地進発沖繩周辺に來寇中の敵機動部隊に体当り攻撃を敢行し戦艦五隻空母二隻及艦種不詳三隻を轟沈或は大破し多大の戦果を挙げ全員散華せり」と刻まれている。

申良基地の出撃戦没者慰霊塔は、出撃特攻隊員の鎮魂とその偉業を顕彰するため。昭和44年10月11日に建立されたが、その建立に当たっては、当時の申良町長が中心となって建設既成会を方々の特攻隊戦没者に寄せる熱い思いが込められており、絶好の環境を醸し出している。また、式典当日は、海上自衛隊鹿屋航空基地部隊の支援も受けて、厳粛盛大に催行されているが、その受付事務を始め、企画・運営等は全て市の職員が担当している。当日受付で、持参した当頭彰会編纂・発行の『特別攻撃隊全史』他申良基地関係の会報『特攻』等を贈呈したところ、大変喜ばれた。

追悼式は、定刻14時に開始され、式次第に則り整齐と進められた。参列者は、御遺族約50名、生存戦友等約60名、鹿屋航空基地の儀仗隊、音楽隊等支援部隊約40名、来賓、市職員その他一般参列者約100名、合計約250名であったが、全国各地から参集された御遺族、生存戦友の方々の高齢化が目立ったが、若い甥・姪、その子たちの姿も見受けられた。開式のことばに次いで一同慰霊碑に拝礼し、音楽隊の演奏の下、丘の上の慰霊碑前にある2本の旗竿に、向かって左側に国旗が、右側に軍艦旗と市旗が、それぞれ市の職員及び海上自衛隊の儀仗兵によって掲揚された後、全員で国歌を斉唱した。そこで、一同が見上げる、青く澄み渡った大空に、近くの鹿屋航空基地から飛来した哨戒ヘリコプター1機とP3C哨戒機1機の追悼飛行が行われた。終わって一同戦没者に対し黙祷を捧げた後、嶋田芳博鹿屋市長が式辞を述べられた。その中で市長は、世界の各地では今なお、テロや紛争、小規模の戦争が絶えない中、日本は国内外の困難な問題を抱えつつも、平和と繁栄を維持し得ているのは、戦没特攻勇士達が身を捨ててこの国を護って下さったからであり、我々はこの尊い犠牲を忘れず、恒久平和を祈念しつつ、努力しなければならぬ、と述べられた。

結成し、主として地元住民の熱意と協力によって実現し、以来毎年10月11日前後の土曜日に地元(申良町、現在は鹿屋市)が主催して追悼式を催行しているのとこのことであり、基地跡の慰霊施設を始めとする平和公園の整備等を含めて、地元の

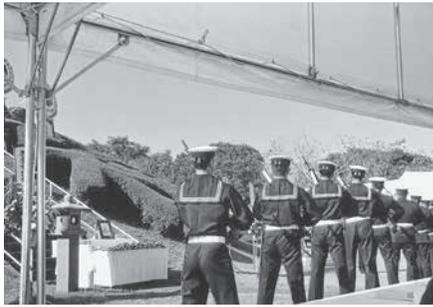
続いて、鹿屋市会議長、海上自衛隊鹿屋航空基地第1航空群司令、鹿児島県雄飛会会長からそれぞれ追悼のことばが捧げられた。また、生存戦友を代表して、鹿児島県雄飛会の中原敏實氏

(88歳)が追悼のこぼを捧げたが、
 その中で宇佐海軍航空隊所属時代の訓
 練の模様に触れ、当時のパイロット達
 は、いつでも特攻出撃ができるよう、
 敵艦船撃滅の使命感に燃えて日夜激し
 い訓練を重ねていた。航空特攻では、

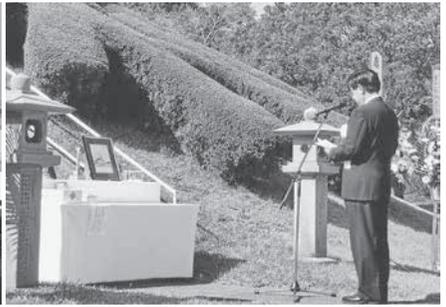
練に励んでいた。国のため、家族を護
 るためには、自らの命など惜しくはな
 かった。今の若者達も「一旦緩急アレ
 バ義勇公ニ奉ジ」の精神を堅持しても
 らいたい、と述べられた。

次いで、参列者全員による献花が行
 遺族を代表して、菊水部隊天山隊・攻撃

の鹿兒島(錦江)湾の夜景は素晴らしく、
 申良の慰霊塔と共に賑やかに焼き付いた。



甲銃斉射



嶋田鹿屋市長式辞



遺族代表陰地清文氏の謝辞



「同期の桜」の斉唱

敵艦隊のレー
 ダー網を避け
 るため、海面
 すれすれの超
 低空攻撃の訓

われ、慰霊碑前で、儀仗隊による弔銃
 3発の斉射が行われた。
 その後、申良基地から昭和20年4月16
 日に攻撃し、沖繩周辺で特攻戦死された
 菊水部隊天山隊の服部寿宗二飛曹(甲飛
 12期)の遺書朗読があり、生存戦友達約
 20名による「同期の桜」の斉唱があった。
 高齢化の目立つ生存戦友の方々の想いの
 籠もった「同期の桜」は、胸に迫るもの
 があった。次いで、式電が披露された後、

あつたが、筆者は翌13日(日)午前、
 福岡市の福岡県護国神社において斎行
 される同神社御創建70周年記念の秋季
 大祭に、同神社に合祀されている義兄
 らの親族の一員として参列するため、夕
 刻の鹿屋バスセンター発、垂水港へ鹿
 兒島港(フェリー)經由、鹿兒島駅行
 きのバスで鹿兒島中央駅に向かい、新
 幹線で博多駅に向かった。途中約40分



昭和20年4月6日 菊水1号作戦沖繩特攻総攻撃

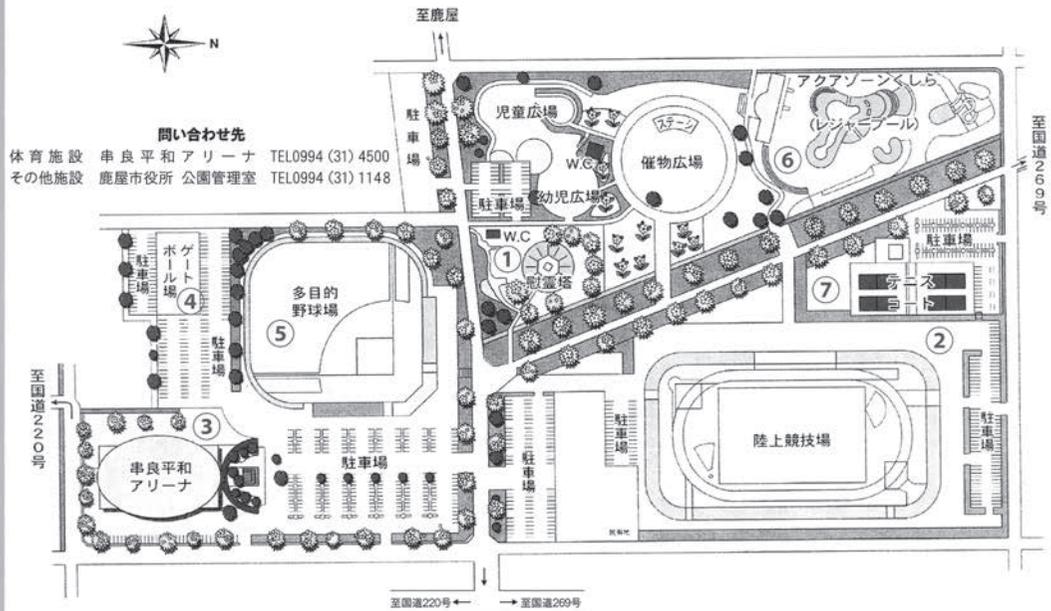
申良基地指揮所前 午前11時 第131空司令・浜田武夫大佐の訓示

- ①第1八幡護皇艦隊 45名 ※後方に爆装した97艦攻が
 - ②第1護皇白鷺隊 42名 整列しているのが見える
 - ③菊水部隊天山特攻隊 30名
 - ④天山夜間雷撃隊 18名
- 総員135名

二五六飛行隊戦死者の陰地達二二飛曹
 (19歳)の実弟・陰地清文氏が謝辞を
 述べられ、再び音楽隊の演奏の下、国
 旗、市旗、軍艦旗の降納があつて、一
 同慰霊碑に深く拝礼をした。
 追悼式は、15時30分、閉式のこと
 ばをもって滞りなく終了したが、誠
 に丁寧な真心の籠もった追悼式であつ
 た。御遺族や生存戦友の方々の高齢
 化により、参列者は減少の傾向にあ
 るであろうが、本慰霊塔を始めとし
 るメモリアルゾーンは平和公園とい
 う絶好の環境に位置し、かつ、市当局
 者の熱意と、近くの鹿屋航空基地隊
 の支援を受けて、本追悼式は、末永
 く継承されていくものと思料する。
 終わって、鹿屋のホテルにおいて、
 夕刻17時頃から御遺族、戦友の会を
 中心に懇親会が行われるとのことで

平和公園案内図

Heiwa park information



旧海軍航空隊申良基地出撃戦没者追悼式に参列して

会員 海老沼 静香

平成25年10月12日(土)、旧海軍航空隊申良基地出撃戦没者追悼式に参列させていただきました。

追悼式は晴天に恵まれ、雲一つない青空をバックに、真っ白な慰霊塔が美しく聳え立っておりました。私自身、旧特攻基地を訪れることは初めてでしたが、この申良基地跡は、当時、航空機整備員養成のために開墾され、戦局の悪化に伴い、特攻基地となったとは思えないほど、のどかな場所でした。今では、鹿屋市立の串良平和公園となり、地元市民の体育や憩いの場となっており、当時の滑走路跡に沿って植えられた桜並木は、春には見事に咲き誇り、桜の名所になっているようです。

そして、追悼式は、午後2時より3時30分まで執り行われました。追悼式は穏やかな風が心地よく吹く中、粛々と進められました。

追悼飛行では、参列されている方々は一心に空を見上げ、中には手を振っている方もおられました。私は初めての光景にただ見上げているばかりでした。飛行機が飛び去るのも一瞬。見

送るのも一瞬。当時、見送られる側も見送る側も、その時その時、その一瞬一瞬にどれだけの気持ちを込めたのかと考えたら目頭が熱くなっていました。

そして、式も半ばを過ぎ、生存者合唱で、「同期の桜」が歌われました。心に響きました。体験された方々が当時を回想し、仲間を想い、心を込めて合唱された歌声は力強く、今でも耳に残っています。合唱後、席に戻られたお一人が、涙を拭いておられたお姿に、私も胸を締め付けられる思いでした。

戦争を体験していない私達の世代は、体験者の方々からお話を伺うことや文献や体験記から想像をすることしかできません。しかし、気持ちを引き継ぐことはできるのではないかと思います。鹿兒島県雄飛会の船川睦夫会長が、追悼のことばの中で「滅私報國、祖国の存亡、家族を守るために散華された特攻隊員のためにも、日本の美徳・和の精神、歴史、そういったものを引き継ぐのが若者の役目：」と熱く仰っておられました。後に繋げたいとの思い・心が、これからの世に届き、歴史の真実が繋がっていくとができればと切に思いました。

今回の追悼式に参列させていただきました。大変貴重な経験をさせていただきました。このような機会を与えてくだ

さったことで、自分が今日本という国に生きておられること、自分の意志で動こうと思えば動ける自由があること、命というものが、家族というものについて考えさせられ、普通のことを当たり前に思うことが、当たり前ではなく、感謝すべきことであると改めて感じることができました。

串良基地から終戦の三日前に、夜間雷撃で敵艦を大破したという記録を読みました。最後の最後まで特攻を続けた特攻隊員の方々の日本人の精神に倣い、串良基地から出撃し散華された五七三柱の御英霊に追悼の誠を捧げ、今生きさられることに感謝し、日々精進して参りたいと思います。

千葉県旭市戦没者追悼式 参列と旧海軍香取基地 慰霊碑参拝

遺族会員 廣嶋 文武

千葉県旭市主催で隔年に実施されている、同市戦没者追悼式が平成25年10月17日(木)10時から同市東総文化会館において催行され、旧海軍香取基地関係者として参列した。同追悼式は、同市関係の戦没者1863柱、戦災死没者54柱、香取基地関係戦死者954柱、合計2871柱の御霊を追悼する

慰霊祭である。式典は定刻10時に始まり、明智忠直旭市長、県市町村及び各界代表の追悼の言葉と献花に続き、旧海軍香取航空基地関係者の献花礼拝があり、御霊安かれと、心からなる祈りを捧げた。続いて、地元有志12名による献吟の奉納、ラッパ隊による旧陸海軍の起床から就寝までの各ラッパの吹奏が行われ、約2時間に及んだ荘厳、盛大な式典は、参列者に深い感銘を与えた。

式典終了後直ちに、旧海軍香取基地関係者は、明智市長共々、旧基地跡の慰霊碑に献花、参拝し、深甚なる慰霊の誠を捧げた。後掲の写真に見える三角塔は、遙かに太平洋を望んで立ち、その碑面の「慰霊」の揮号は、旧海軍航空の重鎮・源田実氏の筆になるもので、慰霊碑の建立に当たっては、現海原会の名譽顧問前田武氏を中心に活動されたと伺っている。旧海軍256空の久保山氏、彼の硫黄島特攻の第二御

楯隊隊員の実妹小島さんら、さぞや感慨深く、碑前を立ち去り難いお気持ちであったろう。筆者の兄忠夫も昭和20年2月、この基地から父宛に3通の葉書を発信し、「万朶の桜として咲き香る日を待つて一生懸命やります」と言い、昭和20年8月9日、茨城県百里原海軍航空基地から、第四御楯隊隊員として金華山沖で特攻戦死したが、参列者はそれぞれの想いを胸に、慰霊祭に臨んでおられたことであろう。

特筆すべきは、元千葉県八日市場市の市会議員を長く務められた石毛さんは、県立東総高校の歴史研究会で、戦争を全く知らない生徒達と共に、特攻隊を中心に戦争についていろいろと研究され、その結果を紀要に纏めて近々発表されるとのこと。石毛さんは、小型機用、大型機用の掩体壕を、戦史を飾り、物語る貴重な遺産として、高校生に伝える語り部として活躍されている。かつての基地跡には、太陽光を利用し



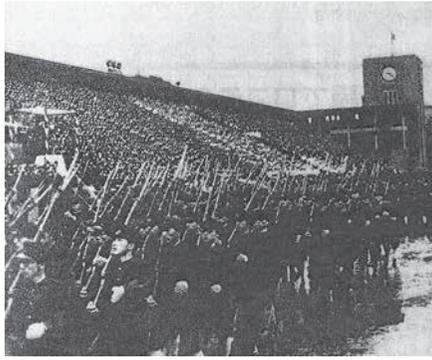
たソーラーシステムの広大な敷地も存在している。また、毎回参加しておられる小島さんは、昭和20年2月21日、硫黄島周辺の米海軍艦船を特攻攻撃して大戦果を上げた第二御楯隊隊員の兄を含めて45柱の特攻隊員を祀る硫黄島摺鉢山の慰霊碑に参拝し、優しかった兄を偲んできたことを語って下さった。

特攻隊員は、祖国を、父母や家族を自分が命を捧げることによってこれを護り、悠久の大義に殉ぜられた。このような勇士達の御霊安かれと、その御冥福をお祈りするばかりである。この旭市の慰霊祭が末永く催行されることを願い、改めて2871柱の御霊に深甚なる誠を捧げるものである。



学徒出陣70年「第30回大東
亜戦争戦没全学徒慰霊祭」

陸士61期 飯田 正能



多くの学徒が行進した東京・神宮外苑競技場の壮行会 (1943年10月撮影)

平成25年10月27日(日)、靖國神社において、第30回大東亜戦争戦没全学徒慰霊祭が斎行された。学徒出陣70周年を記念しての慰霊祭である。昭和18年10月21日、明治神宮外苑競技場(現国立競技場)において、文部省主催による出陣学徒壮行会が行われてより70年の節目の年を迎えた。その10月21日には、競技場の傍らにある学徒出陣記念碑の前で、戦没学徒の追悼式が行われた。2020年の東京オリンピックの主会場となる陸上競技場が大改築されるため、記念碑も移設あるいは取壊

しとなるためである。

学徒出陣とは、当時の大学生達は、国民の義務であった徴兵を猶予される立場にあった(昭和2年-1927年に制定された兵役法は、満20歳の男子に、陸軍は2年、海軍は3年の兵役を義務付けていた。一方で、中学校以上の学生・生徒には、27歳になるまで徴兵猶予の特典があった。しかし、日米開戦が迫った昭和16年-1941年10月、勅令によって兵役法が改正され、猶予は大学生で24歳、ただし、医学部のみは25歳に短縮された。卒業時期も昭和16年度には12月、昭和17年度以降は9月に繰り上げとなった)が、戦局の逼迫に伴い、兵力の補強、特に将校及び下士官の不足を補う対策として、更に昭和18年10月1日に、学生・生徒の徴兵猶予が停止された。いわゆる学徒出陣である。停止の閣議決定は9月21日に行われ、翌日には東條英機首相がラジオで発表し、該当する学生・生徒は、同年12月に徴兵検査を受け、合格者は同月中旬に、陸海軍に入営するという慌ただしさであった(ただし、理工系の学徒達は、徴兵検査を受けるだけで、当分入営を延期する措置が取られた)。この措置によって昭和18年12月に入営した学徒は、全国で9万人、13万人と言われているが、翌昭和19年

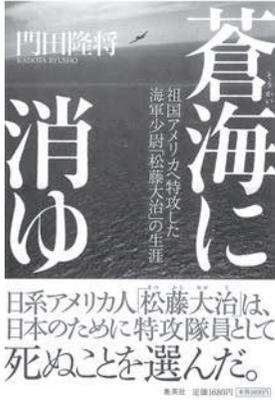
には、徴兵年齢が19歳に引き下げられて入営者は倍増しており、繰り上げ卒業などもあって結局、出陣学徒の総数は、明確ではない。また、出陣学徒の戦没者数についても、各大学によって卒業生を含めるなど、数え方がまちまちであるため、正確な数ではないが、白井厚慶大名誉教授の調査によると、早大が4561柱、慶大が2225柱、東大が1652柱などとなっている、とのことである。

昭和18年10月21日の出陣学徒壮行会では、雨の降りしきる中、東京帝国大学以下77校約2万5千人の学徒達は、着剣した銃を肩に堂々とクラウンドを分行進した。壇上から東條首相は、「敵米英においても、諸君と同じく幾多の若き学徒等が戦場に立っている。諸君は彼等と戦場に相対し、気迫においても戦闘力においても、必ずや彼等を圧倒すべきことを深く信じて疑わぬ・・・」と、鼓舞激励した。学生を代表して、東京帝国大学文学部2年の江橋慎四郎(元鹿屋体育大学長・93歳)氏が、「生等もとより生還を期せず。在学学徒諸兄、また遠からずして生等に続き出陣の上は、屍を乗り越え・・・」と、勇ましくも悲壮な答辞を述べた。観客席では、女子生徒を含む学徒等96校約5万人が見送り、競技場には「海

行かば」の斉唱がこだました、と当時の新聞・NHK等は一斉に報道した。

この戦没全学徒慰霊祭は、各大学の学生達で組織する実行委員会(実行委員長・上野竜太郎國學院大学研究生)が主催して、昭和59年以來毎年、靖國神社において斎行されているが、平成25年は第30回、学徒出陣から70年という節目の年に当たるので、式次第を第一部と第二部に分け、第一部は「先輩学徒を偲ぶ集い」として、靖國神社参集殿2階大広間において、13時-15時の間、国歌斉唱の後、実行委員長、来賓挨拶に続き、後掲のような学生発表があり、次いで、ノンフィクション作家として有名な門田隆将氏を講師に迎え、「出陣学徒は何を守るため、戦ったのか」と題する講演を拝聴した。

門田隆将氏については、先に当顕彰会会報『特攻』第92号(平成24年8月号)の「新刊図書紹介」及び「偕行」(偕行社月刊誌)平成22年10月号「台湾を救った根本博陸軍中将」でも紹介したが、氏は昭和33年(1958年)高知県生まれ、中央大学法学部卒。雑誌メディアを中心に、政治、経済、司法、事件、歴史、スポーツなどの幅広いジャンルで活躍しており、著書に『なぜ君は絶望と戦えたのかー本村洋の3300日』(新潮文庫)『あの一瞬



アスリートはなぜ「奇跡」を起こすのか(新潮社)、『甲子園への遺言』『神宮の奇跡』(講談社)、『康子十九歳 戦渦の日記』(文藝春秋)『風にそよぐ墓標 父と息子の日航機墜落事故』(集英社)、『甲子園の奇跡 斎藤佑樹と早実百年物語』(講談社文庫)などがあり、『この命、義に捧ぐ 台湾を救った陸軍中将根本博の奇跡』(集英社)で、第19回山本七平賞を受賞。また、『蒼海に消ゆ―祖國アメリカへ特攻した海軍少尉「松藤大治」の生涯―』(集英社)ほか戦史に関するノンフィクション作品なども多数執筆し、講演会などでも精力的に活動している作家である。

松藤大治は、日本のために特攻隊員として死ぬことを選んだ。日系アメリカ人のために死ぬことを選んだ。

溢れる講演を拝聴した。『蒼海に消ゆ』に関して、松藤大治の母校東京商科大学(現一橋大学)の後輩でもあり、門田氏の取材にも協力した、筆者の同期生大澤俊夫氏の、前記紹介記事があるので、参考のため、後ろに再掲する。門田氏は講演の中で、松藤に代表される出陣学徒、特に特攻隊員・特攻精神を育んだのは、2千年を超える我が国の歴史、伝統、風土、文化に培われた大和魂である。日系アメリカ人である松藤には、その父母を始めとして、日本人のDNA、大和魂が色濃く継承されていたのである、と強調された。

慰霊祭の第二部は、拝殿において、15時30分〜16時30分の間、例年のおり、国歌斉唱、修祓・献饌・祝詞奏上の神事が行われ、御祭神の御遺文奉読及び御遺詠拝誦の後、上野竜太郎実行委員長が祭文を奏上し、献歌奏上、出陣賦(大木杉彦作詞、川添萬夫作曲)斉唱の後、全員御本殿に昇殿し、代表により玉串を奉奠して拝礼。滞りなく式典を終了し、遊就館前で記念の集合写真を撮影して、解散した。

若い学生達実行委員会の主催による慰霊祭であるが、誠に充実した有意義な内容の誠意に満ちた式典であった。

《御遺詠》

○市島保男 命

神奈川県出身
早稲田大学

海軍第14飛行科予備学生

沖繩にて戦死

輝ける大和島根は万世に

栄え栄えて四方照らす國

吹きすさぶ嵐となりて仇國を

撃ちてし止まん死して尚のち

再びは生きて踏まざる神國の

南の空晴れ渡る今日の日

櫻と散らん若き命を

惜しからぬ命を君に奉り

莞爾と散らん大和男子は

《学生発表》

①「母校の先輩学徒の精神を継承せむ」(要旨)

國學院大学一年 北條 智久

七〇年前、我々と同じ学生はベンを銃に代えて、一旦緩急、義勇公に奉じて出陣して征かれた。私の母校、國學院大学からも大勢出征されている。同じ大学で学び、祖國日本のために散華された先輩を思えば感謝に堪えない。

その出陣された國學院大学の学徒で、白石理一郎命がおられる。命は「学道

を護持して探究するといふ事は我々の

真の本分であったかもしれない。我々

はそれを捨て去るのに幾度か躊躇した。それは率直に告白して、恩愛の絆を切る時と同じ様に悲痛なことであった。そしていま顧みて万人の前に慚愧せざるを得ない。だが遂に我々をして起たしめたものは、我々の胸中に生きる楠公であり、松陰であった」と述べられており、学業半ばにして正に憂國の思いがあったが故の決意だったと拝察した。今日、私を含む大半の大学生は日々、将来を考え学問を本分として日々努力している。その中であって私には実に恵まれていると感じる。この今を生きる学生として、また日本人として決して七〇年前に学徒出陣された英霊への感謝と敬意を忘れてはならない。そのためにも慰霊祭を執り行うことは意義あることと思う。靖國神社の御祭神は幕末以来、先の大戦までの国事殉難の英霊二四六万余柱で、皇族、軍人・軍属、幕末維新の志士、従軍看護婦、文官、民間人など、身分や男女の別を問わず、多種多様な方々である。英霊祭祀における祝詞の文面には、慰霊・追悼・顕彰を含む表現に「祭神の意志の継承、加護の祈り」が付加わっている。私はこの大東亜戦争戦没全学徒慰霊祭に際して、この意志の継承とは何かを考えてみる。

そこで私が想起するのは、中央大学

から学徒出陣された茶谷武命の御遺書である。そこにはこうある。「私の肉体はここで朽つるとも私達の後を私達の屍をのりこえて私達を礎として立ち上がってくる第二の国民のことを思えば、又之等の人々の中に私達の赤き血潮が受け継がれていると思えば、決して私達の死もなげくには当たらないと思います。」と述べられている。私は学徒出陣された方々が止むに止まれぬ大和魂、憂国の想いをもって征かれたことを鑑みれば、現代を生きる第二の国民として、日本人としての誇りと愛国心を持ち、常々国の現状を深謀遠慮しながら生きて行くことが継承となり得るのではないかと思う。私はそうした気持ちで将来の目標に向け、邁進して行きたいと思う。

②「後世に生きる日本人として」
(要旨)

専修大学二年 芹田 和久
今年は学徒出陣七十年という年に当たります。私は大学に入学してから先輩学徒の方々の御遺書に触れ、その御心に近づこうと努力してまいりました。その中で何故か、七十年前の当時、私達と同じ学生が自ら死ぬと分かっているながらも戦地へと向かわれたのか疑問が湧いてまいりました。本や、遊就館に展示されている学徒の方々の御遺

書を拝読すると、家族の身を案じ、祖国の危急を前にして、自分が行かねばならないという思いで戦地へと向かわれた方が多くいらつしやいます。私はそういった先輩学徒の御遺書の中に、使命感や熱意を感じ、また後世に生きる者たちにその思いを託そうとされたように感じました。そのことを強く感じた先輩学徒がおられます。

それは、中央大学から学徒出陣された茶谷武命という方です。茶谷武命の御遺書の一節に「私ノ肉体ハコ、デ朽ツルトモ、私達ノ後ヲ私達ノ屍ヲノリコエテ私達ヲ礎トシテ立チ上ツテクル第二ノ国民ノコトヲ思ヘバ、又之等ノ人々ノ中ニ私達ノ赤キ血潮ガウケツガレテイルト思ヘバ、決シテ私達ノ死モナゲクニハアタラナイト思ヒマス。」という言葉があります。

この御遺書を拝読させていただき、私は「第二の国民」に向けられた期待や希望といったものを感じました。自らの死を乗り越え、自らの想いを背負ってくれるであろう、後世に生きる者たちに想いを託され、戦いに征かれたのではないかと思いました。しかし、今を生きる私は茶谷武命を始め、戦場に馳せ参じた先輩学徒の方々の思いに本当に応えられているのだろうかと思安になります。先輩学徒の思いを偲び、

御遺書を拝読する度、私は自分の至らなさに、未熟さに恥ずかしくなります。自分の何一つとつても、学徒の方々に及ぶものなどなく、先輩学徒が私達後世に生きる者に託された想いも未だにつかみ取ることさえできていないのではないかという思いがありました。しかし、先輩学徒の思いを偲ぶ中で考えるようになったのは、先輩学徒の方々と自分を切り離して考え過ぎていたのではないかということに気付きました。

私は先輩学徒の方々の思いを決して無駄にはしたくないと思っております。それにはまず、私がかれからも学徒の方々の思いに心を寄せる努力をし続け、先輩学徒の託された思いを見付けたいと思います。私が「第二の国民」であると胸を張って言えるように、自分の現場で頑張っていきたいと思えます。先ずは、私の一つの目標である憲法改正の道を、仲間と共に模索して行きたいと思えます。

《新刊図書紹介》

—会報『特攻』第92号—

或るアメリカ人二世の特攻

陸士61期 大澤 俊夫

門田隆将というノンフィクション作家がいる。彼は平成22年に『この命、義に捧ぐ—台湾を救った陸軍中将根本博の奇跡—』を刊行し、山本七平賞を受賞している。この作品を執筆するに当たっては、偕行社にも取材に来ていた。その作家が、大東亜戦争開戦70周年に当たる平成23年に『蒼海に消ゆ—祖国アメリカへ特攻した海軍少尉「松藤大治」の生涯—』を上梓した。この物語の主人公である松藤大治は、私の母校東京商科大学（現一橋大学）の先輩に当たるので、私も微力ながら門田氏の取材に協力した。そのような縁で、『蒼海に消ゆ』を諸兄に紹介したいと思ひ、ペンを執った次第である。

松藤大治は九州出身で、アメリカ・カリフォルニア州・サクラメント市に移住し、食料雑貨商を営む松藤岩雄とヨシノ夫妻の長男として生まれた。大治は、小学校を卒業すると「日本とアメリカを結ぶ外交官になりたい」と、日本で学ぶことを決意し、両親の故郷である福岡県の糸島中学に入学し、同中学を4年修了で、東京商科大学予科に入学する。商大予科では剣道部に所属し、1年生の時から商大最強の剣士として対外試合に負けなしの活躍をしている。そして昭和18年10月の学徒出陣で海軍を志願し、予備学生第14期生

として戦闘機乗りに選ばれる。

松藤大治はアメリカ国籍を持っていて、日本の兵役の義務は免れることができたが、彼は進んで海軍に入隊した。彼はアメリカ生まれで日米の国力の差は熟知しており、この戦争に日本は勝てないと、学友や親戚に漏らしていたという。にも拘わらず彼は明確に自分が日本人であることを、自らの意志で選択し、学徒出陣の道を選んだのである。

昭和20年4月6日、松藤は最後の昼食である稲荷ずしを頬張りながら、午後1時55分に鹿屋基地を発進、沖縄海域に向かった。そして、午後3時58分「敵艦に必中突入中」の符号信号を残し、蒼海に消えて行った。その日の特攻による戦果は、アメリカ側の発表によると、空母他48隻が大破し、駆逐艦6隻が沈没したということである。

松藤の戦死から48年後、松藤と共に元山海軍航空隊で訓練を受けていた大野木英雄(東京商大で松藤の1年先輩)

は、松藤の母堂ヨシノがロサンゼルスは、松藤の最後の模様を伝えるべく遥々とヨシノを訪ねた。大野木の話は黙って聞いていたヨシノは、初めて口を開き「男というものは、そうゆうもんです。国の大事には男はキパツとや

らにや、大治は立派な事をして死んだんです。そうじゃないですか大野木さん」と。車椅子に座ったままヨシノは、凛として大野木にそう話したのである。

戦後、松藤大治の戦死の報を受けたヨシノは、昭和28年、船酔いに苦しみながらも太平洋を越えて来日し、靖國神社に参拝して、大治のため永代神楽を奉納している。

時は移り、平成6年6月22日のことである。訪米された天皇、皇后両陛下は、是非にと希望され、移民以来筆舌に尽くし難い苦勞を重ねてきた、日系一世たちが暮らす敬老引退者ホームを訪ねられた。老人たちは、両陛下を歓迎して、「さくらさくら」や「埴生の宿」を歌って両陛下をもてなした。皇后陛下は、翌年の「歌会始」で、この時のことを

移り住む 国の民とし 老いたまふ 君らが歌う さくらさくら と詠まれている。

わずか1時間ほどの御滞在であったが、両陛下が会場を退場される時に、天皇陛下は、90歳のヨシノに向かって導かれるようにお歩きになり、「お元気で」と、一言お声を掛けられ、ヨシノに握手された。ヨシノは感激の余り声を出すこともできず、ただ頭を垂れ

るだけであったという。ヨシノは、この時の感激を、自分にとって「人生の輝ける最高の瞬間だった」と家族たちに語っている。この天皇陛下との握手の写真は、アメリカに住む松藤家の三世、四世たちに、家宝として大切に受け継がれている。

この時の関係者の話では、天皇陛下は、ヨシノの長男が特攻で戦死したことは御存じでなかったという。偶然ヨシノの所へ歩み寄せられたのかもしれないが、しかし事実として松藤大治は、死して母に孝養を尽くしたのである。

平成23年は大東亜戦争開戦70周年であるが、大正100年にも当たる年である。この大戦における戦没者は、240万人を数える。この中で大正世代の青年たちは、実に200万人も命を落としている。つまり大正世代の青年たちは、大東亜戦争の主戦力として、国を守り、家族を守るといふ使命感と責任感から戦い、潔く散華していったのである。戦後世代の人たちは、この

尊い使命感を持った英霊たちを、軍国主義教育のせいだと見る者がいるが、それは全く軽薄な自虐史観のなせる誤解である。戦時中でも、思想的にも信條的にも柔軟な考えを持っていた人たちは少なくなかった。しかしそういう人たちも、運命に逆らわず、国のため

家族のために銃を執り、戦い、そして散っていったのである。

門田隆将氏は、この物語の取材に当たって、この当時の人たちの人間関係の濃さに驚いたと記している。やはり生と死の分かれる極限の状況で、心を交わし合った人たちでなければ理解できないことなのかも知れない。

この本のクライマックスは、何と言っても戦後48年を経て、松藤の戦友が遥々と渡米して、母堂ヨシノに報告したのに対し、ヨシノが「男というものは、そうゆうもんです。国の大事には男はキパツとやらにや・・・」と応えた場面であろう。この母にしてこの子あり。これこそ日本の良き伝統の精神であり、文化であると思う。我が61期生も、余生短しといえども、一人でも生き残っている限り、語り部として後世にこの日本の伝統文化を伝えて行きたいものである。

発行所 株式会社集英社 〒101-8050

東京都千代田区一ツ橋2-15-10 電話 03-3230-6393

定価 本体1600円+税

**埼玉県護国神社
「特攻勇士之像」 建立除幕
式に参列して**

事務局 金子 敬志

平成25年10月31日(木)、埼玉県護国神社において、13体目となる「特攻勇士之像」の建立除幕式が行われ、当顕彰会から、杉山理事長以下、私を含めて8名が参列しましたので、その概要を報告いたします。

埼玉県護国神社の概要について、同

県観光協会の解説によれば、御祭神は鳥羽伏見の役以来、国事に殉じた埼玉県関係の英霊5万1千余柱で、創建は昭和9年4月9日、埼玉県招魂社として設立され、昭和14年3月神社制度の改正により埼玉県護国神社と改称され、同年4月に指定護国神社となった。昭和21年2月神社制度の変革により、宗教法人埼玉県護国神社と改められ、更に昭和23年10月埼玉霊(さいたま)神社と改称し、昭和27年再び埼玉県護国神社と改称して現在に至っている。由緒ある神社ではあるが、拝殿の直前を

道路が通っており、奇異な感じを受ける。聞けば、昭和42年の埼玉国体の際に整備されたそうで、道路によって分断されているが、道路の手前には、長さ100m以上の参道跡があり、立派な石の鳥居も建っている。本来ならば、もっと静かな、厳かな佇いなのではないかと、残念に思う。

除幕式は12時から始まり、修祓に続き、遺族代表・第23振武隊長伍井芳夫大尉の二女白田智子様と来賓代表・当顕彰会杉山蕃理事長のお二方により除幕が行われ、秋晴れの青空の下に「特攻勇士之像」が姿を現した。

その後、式次第に従って神事が斎行され、12時半頃に除幕式は終了し、引き続き、同じ場所でも式典が行われた。

式典は、国旗に敬礼、国歌斉唱、黙祷に続き、「埼玉県特攻勇士之像」建設委員会関根則之会長及び埼玉県護国神社東角井真臣権宮司の挨拶並びに同建設委員会樋口大実行委員長の経過報告があり、続いて、来賓祝辞、遺族代表祝辞等が行われ、陸上自衛隊東部方面音楽隊の奉納演奏があつて、13時10分頃閉式となった。

本日の除幕式を迎えるに当たって、忘れてはならないのは、

埼玉県偕行会副会長であつた故菊地勝夫氏のことである。同氏は、文字通り縁の下の力持ちとして東奔西走、特攻勇士之像建立に尽力されたが、残念ながら除幕式を見ることなく、平成24年10月19日に急逝された。除幕された特攻勇士之像を前にして、改めて同氏の御尽力に敬意を表するとともに、心から御冥福をお祈り申し上げた。

式典終了後、場所を社務所2階に移して直会が行われた。厳肅な雰囲気の中で執り行われた式典とは異なり、くつろいだり和やかな雰囲気の中で行われた直会は、約1時間半で終了し、全ての予定を、滞りなく終わって解散となった。

先に、神社前を道路が通っているのは奇異な感じがすると記載したが、反面、道路から特攻勇士之像が良く見えるので、通りがかりの大勢の方に見ていただき、特攻に対する関心を深め、慰霊と顕彰に繋がるきっかけになればと願う次第である。

遺族代表の祝辞

この度、埼玉県特攻勇士之像が建立され、そして先ほど除幕式が行われ、埼玉県特攻勇士之像を目の前に致しまして、感激で胸がいっぱいになりました。このような立派な特攻勇士之像が出



埼玉県特攻勇士顕彰碑

あの奇烈を極めた大東亞戦争の末期、多くの埼玉県出身の若者たちが特攻隊員となり家族・故郷・祖国を守るため、烈々たる祖国愛に燃え敢然として散華されました。生還を期せず、若い命を遣って国に捧げられたこれら特攻隊員の崇高な精神が永く県民の心に刻まれるとともに次代を担う若者の精神の糧となることを願うものであります。

ここに散華された英霊の勇姿を永く後世に伝えるため、公益財団法人特攻隊戦没者慰霊顕彰会のご協力を得て、埼玉県下遺族、戦友、崇敬者団体をはじめ幅広い県民の真心籠るご浄財をもって埼玉県特攻勇士之像を建立し謹んで奉納いたします。

平成二十五年十月吉日
埼玉県特攻勇士之像建設委員会
会長 関根則之

平成25年度 回天烈士並びに回天搭載 戦没潜水艦乗員追悼式に 参列して

専務理事 衣笠 陽雄

一 追悼式の概要

平成25年11月10日(日)、山口県周南市(旧徳山市)大津島の回天記念館前において、標記の追悼式が執り行われた。昭和37年に発足した回天顕彰会(会長原田 茂氏)が主催し、周南市と地元の全面的な支援を得て、無宗教方式(献花方式)で実施された。参列者は、御遺族約100名、国会議員・陸海空地元各自衛隊指揮官等の来賓10名、一般招待者以下合計約200名であった。特に低学年の家族を同伴した御遺族と付添いに支えられながら参列した御遺族・戦友の方々の姿が目についた。当日の追悼式は、国歌斉唱、黙祷、会長式辞と続き、式辞の中で原田回天顕彰会長は、「・・・母国のため若くして尊い命を捧げられた御英霊のご努力にも拘わらず、我が国は壊滅的な打撃を受け、敗戦を余儀なくされた。戦後の復興は、御英霊の懸命のご努力を偲ぶ想いや敗戦の無念さをバネにした日本人の魂が、世界を驚かす勢いで戦災の復興と高度経済成長を実現させた

ものだと確信する。その急速な発展の中に、私ども国民が気付かぬうちに日本人の良さを惜し気もなく失い続けていたことを、今深く反省し、改善を急がなければならぬ・・・」(要旨)と述べられた。

続いて、安倍晋三内閣総理大臣(代読)、北村参議院議員、本村周南市長、三木呉地方総監、山口県知事(代読)の各来賓から追悼の言葉が述べられた。次いで、参列者全員による献花が行われた。献花中に、周南詩吟連盟峯誠吟詠会により「回天碑」の献吟が行われた。

ここで、追悼飛行が行われた。朝は日が差す程の天候であったが、段々悪化し、飛行時には、飛行ギリギリの条件ではなかったかと思われる。海自31航空群のU-2型1機及び海自小月教育航空群のT-5型3機が飛来し、参列者に感動を与えた。献花の後半には、男性合唱団メールソレイネ(昭和59年結成、団員30名、過去400回実施)が「回天追悼の歌」他数曲を合唱したが、揃いの上着を着た18名の合唱団は、プロ並みの歌声を披露した。献花終了後、今回初めて山口子ども文化研究会による紙芝居「人間魚雷回天」が披露された。次いで、毎回実施している大徳山太鼓「回天」保存会による勇壮な太鼓演奏があった。この

保存会は、昭和53年、徳山商工会議所が徳山市の新しい郷土芸能として発足し、市内企業の若手有志をもって創作演奏を実施しているもので、現在まで400回実施されているそうである。今回の演奏も事前説明はなかったが、山あり谷ありの音色から回天烈士の突入までの物語が彷彿として湧き上がる見事な演奏で、参列者を魅了した。最後に、会長、遺族代表の挨拶があり、追悼式は滞りなく終了した。

二 所見

本追悼式は、毎年200名以上が参列して盛大に執り行われる慰霊祭として知られている。主催の回天顕彰会の旧海軍戦友会の会員数が減少したため、周南市の協力を得ての継続は、慰霊の面では成功していると思われる。今回の追悼式の内容・進行等を見ても、県・市の議会議員・職員等の参加や周南市観光整備課の協力を色濃く感じ、県・市の観光、町おこしという一面があることは否めないが、回天特攻隊の慰霊・顕彰に大きく貢献していることも事実である。今回特に、子供連れ等多くの御遺族の参列を目にして慰霊祭の先行きも心配ないと感じた。

同年から地元新谷郷の住民によって慰霊祭が主催・実行されるようになったが、国民に特攻隊の精神を伝承するためには、まずは現在続いている慰霊祭が地元を根を生やすことが第一で、そこから全国に普及していくというのが効果的な伝承方法ではないだろうか。

戦前から軍との関係が強固な所と最近になって地元・県・市町村との連携が強まった所とは、慰霊祭の方法等に違いはあるが、慰霊祭の継続の必要性を考慮すれば、多少の違和感も受け入れなければならないだろう。現在は、直接の関係者が消え行く前に、慰霊祭の継続方法について検討しなければならない時期にあるのである。

回天烈士並びに回天搭載 戦没潜水艦乗員追悼式参 列の所見

評議員 秋山 政隆

平成25年度の、回天烈士並びに回天搭載戦没潜水艦乗員追悼式参列の機会を有り難く頂戴した。また、今回は、当顕彰会の衣笠陽雄専務理事に同行して参列させて頂いた。以下追悼式について、また、現地に赴き、私が感じたことなどを所見として記したい。

平成25年11月10日(日)朝、当日の現地天候は曇り時々晴れ一時雨、正午前

後に若干の雨模様との予報であったが、幸い、追悼式が催行される時間帯は、概ねこれに支障ない程度の天候であった。午前9時台の徳山港発馬島港行きフェリーは、時折雨が強く吹きつける中を出港した。船内はほぼ満席状態であった。乗客の中に、御遺族と思われる家族連れが幾組もあり、その中に学生服姿の中学生の姿もあった。三世代揃っての参列なのであろうか。近年、御遺族の高齢化が進む一方、家々において、次の世代にその思いと精神がしっかりと受け継がれているのだろう。フェリーは右手に仙島、黒髪島、樺島を見てわずか30分で大津島馬島港に接岸した。

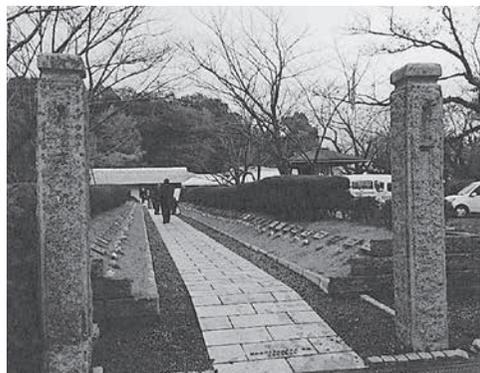
正午の追悼式開始時刻までに少し時間があったので、海へと抜けるトンネルとその先の海上に建設された発射場跡の見学をすることにした。栈橋から海岸沿いの兵舎跡、エプロン跡を右手に見て数十メートルの坂道を上がるとトンネルの入口があった。トンネルは当時整備がなされた回天をトロッコで海側へ運ぶためのものであったが、今でも撤去された輸送軌道(レール)の跡をはっきりと見ることが出来る。当時搭乗員もまた、このトンネルを抜けて回天に乗り込んだ。中程には空襲時指揮所(通信所)跡もある。内部はパネル館も兼ねており、壁面には、多数のパネル写真と説明プレートが展示されていた。その中で、搭乗員・和田稔少尉の手記が目にとまった。「現在では(昭和19年当時)このような兵器によるほかに打開の道はないのではないか。航空機の消耗率は、艦船は敵のレーダーで隠密行動は不可能であり・・・」とあった。なんと本質的かつ象徴的な決意であろうか。卓越した勇氣と崇高な気概がひしひしと伝わってくる。制空、制海権をアメリカ軍に奪われた日本を背負って集まった搭乗員志願者は、その数1375名、そのうち戦没搭乗員89名、殉職者15名、決者2名、また、回天搭載潜水艦と共に

に戦死した出撃整備員35名、潜水艦搭乗員812名である。大津島瀬戸のうつみをあかあかと沈みゆくに回天の姿見ゆなり忘れられぬ君を想えば胸迫る深き思いよ

(回天追悼の歌 三番)

日々の命がけの厳しい搭乗訓練が繰り返される基地での生活で「敵艦にうまく突入することだけを目標に一日でも早く回天の操縦技術を身につけようと必死だった姿が目につけよう

回天記念館の門をくぐり、追悼式会場へと続く参道には、全出撃者並びに殉職者の銘板があり、この日はお一人お一人に花が手向けられていた。追悼式の奉納団体による演舞、合唱、献吟、また、海上自衛隊による追悼飛行は、いずれも圧巻かつ胸に響き、心を打たれるものであった。また、今年からは、山口子どもの文化研究会による紙芝居「人間魚雷回天」が御遺族の希望もあって新たに加えられたとのことであった。当時女子挺身隊で、回天に関わった大津島の石丸サツエさんから聞いた話を同協会が紙芝居にしたのだという(日刊新周)。当日は、同協会の東條里子さんが物語を演じた。今回、大津島を訪れたことで、当時



と同じ風景を目の当たりにすることができた。潮騒に包まれ、改めて海とその歴史に畏敬の念を抱いた。頬に当たる風は清らかで、また鋭く、張り詰めたものを感じた。英霊、烈士が過ごしたこの同じ空間を実感でき、実に有意義な体験となった。このような貴重な機会を与えて下さった当顕彰会各位に改めて感謝の意を表し、御礼の言葉を申し述べたい。

大阪護国神社

「特攻勇士慰霊祭」に参列して

事務局長 羽瀧 徹也

一 慰霊祭の概要

平成25年10月27日(日)、大阪護国神社において肅行された第5回特攻勇士慰霊祭に、当顕彰会の代表として参列しましたので、その概要について報告いたします。

大阪護国神社への参拝は、私個人としては、五十数年振りのことである。高校時代に、ボーイスカウトとして富士山でのジャンボリーに参加する際、安全祈願のために参拝したことを記憶しているが、今回の参拝で改めてその素晴らしさに感慨一入なるものがあった。この慰霊祭については、昨年、当顕彰会から衣笠陽雄専務理事が参列され、詳細な報告記事が会報「特攻」第94号に掲載されているので、重複するところは省略し、今回の特徴的なところを紹介させていただくことにする。

慰霊祭当日は、台風27号と28号の二つの台風の本土上陸が予想されていたため、主催者側では大変心配されていたようであるが、天気予報は見事に外れ、台風は本土東方海上を早い速度で

通り過ぎたため、台風一過の素晴らしき日本晴れの天気に恵まれた。また、当日は偶々第3回の「大阪マラソン」(3万人の参加があり、大阪府庁舎東側にある大阪城公園を出発点とし、大阪市内の有名観光地等を巡り、大阪南港に出来た国内最大級の新国際展示場「インテック大阪」をゴール点とするコースを設定している。)が開催されており、ポートルレースの住之江競艇場と大阪護国神社との間の新なにわ筋(もう少し南に下がると阪堺大橋となり、大阪市と堺市との境界である。)がマラソンコース上三十数キロ地点となっており、慰霊祭参拝中も、元気な応援の声が時々聞こえていた。また、聞くところによると、ノーベル医学・生理学賞を受賞された山中伸弥教授も一市民ランナーとして2年振りにこのマラソンを走られ、4時間16分の記録で完走されたようである。

慰霊祭の開始予定時刻は、午前11時からとなっていたが、参列者の集合状況は極めて良く、「特攻勇士之像」の前には、早くも60名以上が参集されたので、予定より少し早い時間の開式となった。今回も司会進行は、平成21年の建立以来継続して、近畿偕行会の小野寺事務局長兼副会長(仙台陸軍幼年学校49期)が担当された。開式の辞は、

主催者である特攻勇士顕彰会代表の田川康吾近畿偕行会会長(仙幼49期)が述べられたが、開式に先立ち、特攻勇士之像建立事業の発起人とも言える「日本人の心を伝える会」代表の富田和夫氏の逝去を悼んで、参列者全員による黙祷が行われた。開式の辞の後は、全員による国歌斉唱が行われたが、今回の音楽演奏は、陸上自衛隊・信太山駐屯地(大阪市の南に隣接する堺市の更に南に位置する和泉市に所在する。)から来た第37普通科連隊の音楽隊員十数名が担当した。

慰霊祭は、修祓の儀、降神の儀、献饌、柳澤宮司による祝詞奏上と神事が進み、祭主である田川特攻勇士顕彰会会長の祭文(後掲)奏上が行われた。柳澤宮司による祝詞奏上の中に、昨年のこの慰霊祭に参加した我が顕彰会の衣笠専務の報告記事(会報「特攻」第94号)にもあるように、旧満洲の磨刀石において、侵入して来たソ連軍戦車部隊に対し、爆弾を抱えて肉薄攻撃を敢行して散華された石頭予備士官学校第13期幹部候補生のうち大阪出身の18柱の英霊を昨年合祀した旨が含まれていた。

次いで、参列者代表による玉串奉奠が行われ、引き続き、撤饌、昇神の儀と、神事が厳粛に執り行われて、祭事は滞りなく終了した。

神官退場の後、第37普通科連隊音楽隊による慰霊鎮魂の曲が数曲演奏され、参列者一同懐かしく傾聴した。

次いで、音楽隊員の司会により、旧軍のラップと現在の自衛隊のラップの二種類のラップを使つての「起床ラップ」「食事ラップ」「消灯ラップ」などの吹奏が披露され、両者の違いが説明されたが、興味深く傾聴した。

最後に、公益財団法人偕行社理事長及び陸上自衛隊中部方面総監の祝電が披露されて閉式となった。

祭主祭文

大阪護国神社のこの聖地に、平成21年10月24日「特攻勇士之像」を建立し、除幕式を挙行してから本年は5回目の慰霊祭であります。

本日ここ大阪護国神社の御社頭に、ご来賓の皆様とご遺族、戦友、そして関係者の皆様が集まり、第5回特攻勇士慰霊祭を挙行するに当たり、謹んで在天の、大阪ご出身の陸海軍特攻勇士五百二十八柱の御霊をお迎えし、特攻勇士顕彰会を代表して慰霊の言葉を捧げます。戦いが終わって既に68年の歳月が流れました。その間、戦友、朋友は必死に戦後の我が国の繁栄に身を捧げ、見事に奇跡の復興を成し遂げ、世界第2の経済大国になったのであります。しかしながら時の流れは厳粛なも

ので、この日本を支えてきた同胞の高齢化に伴い、真の貧困を知らない、そして我が国の伝統的美徳を知らない平和ボケの世代が中心となるにつれ我が国の繁栄に陰りが見えてきたことも事実であります。

しかし、英霊の皆様、日本の自衛隊も国民も伝統の武士道と和の国民性を失ってはおりません。東日本大震災での自衛隊の働きは国民全員の認めるところであり、被災者の整然とした行動と他者を思う心は、諸外国の賞賛的となったのであります。幸いに昨年末の衆議院議員選挙、今年7月の参議院議員選挙では、自由民主党が圧勝し、安倍晋三内閣が誕生しました。誕生以来「戦後レジームからの脱却」を掲げ、まず経済政策アベノミクスによりデフレで疲弊した経済の回復を目指し、対外関係にあつては「積極的平和主義」の看板を掲げ、アメリカ、ロシアをはじめアジア、中近東、ヨーロッパを精力的に訪問して外交戦略を重ねています。しかしここへきて、新たな問題が発生してきました。それは、アメリカの国際社会への影響力が落ちるべ落としてのように低下して、新しい国際秩序の構築に至る混乱の時代に入ったことでもあります。今までのアメリカの傘に安住する時代は既に去ったのでありま

す。「自分の国は自分で守る」だけでは済まなくなりつつあるのです。日本の役割は、かつてないほど重要になりました。国民全体の意識を高め、力を強化し、責任を全うできる「強い日本」に生まれ変わる必要が発生したので。我々はこれを絶好の機会と捉え、前進しなければなりません。一方共産支那や韓国は、経済危機に差し掛かっているばかりでなく、特に共産支那にあつては、人権の弾圧、貧富の格差の拡大、高級役人の収賄汚職問題の深刻化、生きた人間からの臓器強制摘出売買などにより、いつ暴動が全国規模になるかは時間の問題と云われています。

安倍晋三首相の「戦後レジームからの脱却」は「真の意味における独立国家の再建」であります。その中心課題が「自主憲法制定」ないしは「憲法改正」であります。自衛隊は「国防軍」にしなければなりません。我々の使命は、「安倍政権が十分に仕事のできる環境作り」であることは明らかであります。天上の諸霊よ！安倍政権が続く限り、夜明けはそう遠くはありません。我々のこの使命が達成され、我が国と国民の安全と繁栄が確保されることにお力を賜らんことを切に希い、慰霊の言葉といたします。

平成25年10月27日
特攻勇士顕彰会
会長 田川 康吾

特攻勇士之像前での慰霊祭は無事終了し、護国神社本殿の裏手にある儀式殿に移動しての直会となった。移動前に、護国神社境内脇にある道路を大阪マラソンのランナーが走行する様子を見る事ができたのは幸運であった。9時のスタートだったので、慰霊祭終了の12時半頃には、トップランナー達は既にゴールした後であつたらうが、遅れて懸命に走る少数のランナー達の姿が印象的であつた。

直会の会場である儀式殿は少々狭いため参加人員が制限されたと聞いていたが、50名以上の参加者で会場は満杯のため、多くの方に挨拶をしたかつたが、席の移動が困難な状況であつた。

直会の司会進行は、近畿偕行会の中一皓副会長（防大7期）が務められた。献杯の前に、田川会長及び柳澤宮司の挨拶があり、それに続けて特攻隊慰霊顕彰会代表の私にも挨拶を求められたので、私は平成21年に、本特攻勇士之像の大阪護国神社への建立奉納事業のため、現在の田川会長が東奔西走され、当時港区芝にあつた慰霊顕彰会の事務所に何度も足を運ばれ、種々ご苦労されたこと、柳澤宮司のご英断により、

最適の場所に建立が決定したことなどに対してお礼を申し上げるとともに、建立時に前の野上五夫会長が、書簡で述べられていたように、像の建立のみで終わることなく、以後毎年このように盛大な慰霊祭を斎行しておられることに敬意を表する旨を述べておいた。また、今週末の10月31日には、埼玉県護国神社で第13番目となる特攻勇士之像の建立除幕式と奉納祭典が執り行われることを報告した。この埼玉県護国神社への特攻勇士之像建立奉納に当たっては、田川会長の弟さんであり、昨年亡くなられた菊地勝夫氏（偕行社前事務局長・防大4期）が大変な熱意をもって各慰霊団体等との調整に当たられ、その実現に貢献されたことを紹介させてもらった。また、この機会に、去る9月23日に世田谷山観音寺の特攻観音堂で斎行された第62回特攻平和観音年次法要における当慰霊顕彰会杉山審理事長の祭文（会報「特攻」第97号掲載）を読み上げて挨拶の締め括りとさせていただきます。

なお、直会の席で名刺交換をし挨拶をした主な方々は次のとおりである。

主催者である特攻勇士顕彰会の田川康吾近畿偕行会会長、小野寺政芳副会長兼事務局長、大阪護国神社の柳澤忠磨宮司、昨年同護国神社に合祀された



大阪護国神社



特攻勇士慰霊祭場



特攻勇士之像

公益財団法人真田山陸軍墓地維持会の吉岡毅常務理事、故富岡和夫氏などと共に特攻勇士之像建立の発端となったCD「あ、特攻」の制作に尽力された大阪芸術大学の池田実教授、関西防大同窓会の盛田節生会長、関西防衛を支える会の古澤清常務理事、日本会議大

阪の丸山公紀事務局次長、大和心のつどいの吉村伊平氏等多方面からの参加者の大変貴重な話を伺うことができて誠に有意義な直会であった。
また、これらの方々に加えて現職の自衛官である陸上自衛隊関西補給処総務部長、航空自衛隊幹部候補生学校教

務課長、第37普通科連隊広報室長等が制服で参加されている様子を見るにつけ、私が昔大阪を出る頃、自衛隊は税金泥棒であるとか、憲法違反の自衛隊などと罵られていたのに比べて隔世の感があるように感じた。当然のことではあるが、今では、各種事態での自衛隊の大活躍もあって、その必要性が認知されるようになり、憲法9条の改正も議論されるようになってきている。ことから、時代の流れの変化を大きく感じた慰霊祭であった。

二 参加所見

前記のように、慰霊祭参列の報告をさせていただいたが、その参加所見として相応しくないかも知れないが、今回は、私の出身地である大阪を訪ねた折角の機会であるから、これを利用して、古くから議論されている「またも負けたか八聯隊」の俗謡問題について考察し、所見とさせていたきたい。
何故このような事を考えたかというところ、少し前の当慰霊顕彰会の理事会の席上、〇理事が「また負けたか八聯隊の大阪出身です・・・」と自己紹介したところ、いつもは多くを語らないI監事が「大阪の八聯隊はそのような弱い部隊ではなかった・・・」と、強く反論されたことがあった。後程伺って

みると、I監事は、大阪出身ではないが、現在の大阪府河内長野市にあった大阪陸軍幼年学校（前身は、明治31年2月に大阪市大手前之町に設置された大阪陸軍地方幼年学校で、大正11年、軍縮により一旦廃校となったが、昭和14年再設され、金剛山の麓、楠木正成の居城赤坂城址に程近い千代田台上に新設された。その再興第一期生の陸幼43期生（陸士58期生）は、昭和14年4月採用され、東京・市ヶ谷台の東幼東分校で教育・訓練を受けた後、昭和15年4月から、新しく入校した44期生（陸士59期生）と共に、千代田台上に再興の大阪陸軍幼年学校に学んだ。）の最後の卒業生（昭和17年4月入校、同20年3月卒業の46期生・陸士61期生）であり、大阪で軍人として過ごしたプライドが許さなかったものと思われる。事実、新旧にわたる同幼年学校の卒業生もそうであるが、大阪に駐屯した第四師団隷下の各聯隊は、明治建軍以来日清・日露戦争を始め満洲事変以来今次大戦においても各戦線に活躍し、勇名を轟かせており、多くの戦死者を出している。特に日露戦争における第四師団の活躍は華々しく、猛将奥保鞆大將率いる第二軍の中核として大連湾上陸以来、堅城・南山の攻略を始め、得利寺の戦いから遼陽の決戦を経て奉天

会戦に至るまで決死敢闘し、連戦連勝の戦果を挙げている。同幼年学校の名曲と言われる旧行軍歌『霞立ちこむ金剛山』にも「・・・南山得利寺蹴破りて 長駆遼陽奉天に 異彩をはなち勇名を 掲げし近畿の健児こそ げに古偉人の子孫なれ：」と謳われている。では、「またも負けたか八聯隊、それでは勲章九聯隊（貰えませんよ）」という里謡に歌われている歩兵第八聯隊は、どのような歴史を経て、実際の戦い振りはどうであったのか、参考文献で探ってみた。この歩兵第八聯隊は歴史的に古く、帝国陸軍草創期の明治4年に大阪鎮台（廃藩置県後、この大阪鎮台と共に東北鎮台、東京鎮台、鎮西鎮台の4鎮台が設けられている。）の隷下部隊として、第九聯隊、第十聯隊と共に当初から編成され、明治7年に宮中において軍旗が授与されている古歩兵聯隊である。また、その大阪鎮台（その後、明治21年には第四師団に改編されている）は、現在の大阪城（真田幸村が戦った大坂夏の陣で一度落城したが、その後再び築城され、再度1665年に落雷で焼失し、天守閣を持たない城であった。しかし、昭和の初めに三度目となる天守閣が再建されている）の内堀内で、天守閣横の南側に位置するところに第四師団司令部

が置かれていた。そして、この第四師団隷下の第八聯隊は、大阪城の直ぐ南の、最近になって大規模な「難波宮跡遺跡」として発掘が行われている場所の近くに聯隊本部等が設けられていた。このように、第八聯隊は大阪市の中心部に設置されていたが、所属する隊員及び士官は、奈良県を始めとして近畿各府県の出身者や大阪で徴兵検査を受けた大阪以外の出身者も含まれ、江戸や地方と異なって士族や農民が比較的少なく、商人の割合が多かったようである。

それでは、この歩兵第八聯隊の戦い振りはどうだったのだろうか。陸軍創設後間もない大阪鎮台隷下の頃からこの歩兵第八聯隊は、明治7年の佐賀の乱、明治9年の萩の乱、そして明治10年の西南戦争に従軍している。特に西南戦争においては、初期の段階には、示現流で斬り込んでくる薩摩軍に圧倒されて、多大の損害を受けているが、善戦奮闘している。その証拠として、明治天皇からその勇猛果敢振りを賞された「戦功御嘉賞」という勅語を賜った帝国陸軍史上唯一の聯隊であったと言われている。

この俗謡は、第八聯隊が活躍した西南戦争直後の頃生まれたようであるから、その後の第八聯隊の戦い振りは、その俗謡発生の疑問解決には繋がらないが、兎に角同聯隊は、日清戦争時には第四師団隷下部隊として遼東半島に上陸し、以後その警備に当たり、日露戦争時には、前記のように、同じく第四師団隷下部隊として遼陽、奉天等の各会戦に参戦し、特に沙河会戦において奮戦力闘した結果、奥第二軍司令官から感状を授与されている。また、大東亜戦争時には、フィリピン作戦での第二次バターン半島攻略戦で、第四師団の中核として、立て籠もった米比軍と奮戦敢闘、勝利した結果、本間雅晴軍司令官からその偉業に対し、謝意を述べられている。このような歩兵第八聯隊の戦いの事実からは、「また負けたか」と言われるような弱い部隊では、決してなかったし、むしろ実際には、「山岳戦における丹波の鬼」と言われて恐れられたという丹波笹山の歩兵第七十聯隊の直系母体であったことから、俗謡とは逆に屈強、勇猛な歩兵部隊であったのではなからうか。

昭和60年に出版された『大阪と八聯隊―大阪師団抄小史』の編者中野公策氏（陸士49期）は、後書きに「心ない人々によって、根も葉もない俗謡の濡れ衣を被せられたまま、国難に殉じられた歩兵第八聯隊出身者及び俗謡のたぬめ迷惑を蒙っておられる大阪出身諸部隊と大阪人の冤罪は、誰に訴えたらその潔白を認めてくれるでしょうか。純真素朴な気持ちで同胞の身代わりとなって死んでゆかれた幾万の人々のお気持ちを察するとき、万感胸に迫り、堪え切れぬものがある、この書を残した。」と書いておられ、この書の全編の3分の1を費やして、実際の歩兵第八聯隊が連戦連敗するような事実はなく、決して弱い部隊ではなかったことの証明に努めておられる。

これらのことから「儲かりまっか？ぼつぼつでんねん。ほんまにあきまへ阪の人達は、一般に口数が多く、弁舌が立つという商人気質で、損得勘定に敏く、反権力的という特徴から、偏見混じりの大阪商人気質によって、「大阪の兵隊は弱い」という風説が生まれ、根拠も事実もなく「またも負けたか八聯隊・・・」の俗謡が誕生したように考えている。

祖国を護るために国難に身命を捧げて亡くなられた旧陸軍歩兵第八聯隊を含む大阪出身部隊の英霊達の謂れなき汚名を晴らすことに微力ながら役立てばと、このテーマで私の所見を書かせていただいた。

（注）戦後発足した陸上自衛隊の場合、旧陸軍が所在していた地に所在する師

団、連隊等が比較的多いが、現在の陸上自衛隊においては、大阪に所在していた第四師団司令部は、現在九州及び沖縄を管轄している西部方面隊（鎮西鎮台の置かれた熊本市に所在）の下、福岡県春日市に司令部を置いている。今回取り上げた歩兵第八聯隊は、現在第8普通科連隊として、近畿を含めた西日本を管轄する中部方面隊（兵庫県伊丹市に所在）の下、第13旅団司令部（広島県安芸郡海田町に所在）の部隊として鳥取県米子市に所在している。

若潮会第47回慰霊祭及び総会

評議員（陸士61期）

飯田 正能

平成25年11月10日（日）、11時より靖国神社において、若潮会第47回慰霊祭が斎行され、終わって13時より私学会館「アルカディア市ヶ谷」7階「鳥海の間」において、平成25年度の総会が開催され、当顕彰会を代表して参列させていただいた。

若潮会は、陸軍船舶部隊に所属した陸軍船舶特別幹部候補生出身者の会である。

昭和18年（1943年）9月29日、船舶部隊の拡大に伴い、船舶兵種が創

設され、同年12月、陸軍船舶特別幹部候補生制度が設けられた。それまでは、陸軍の船舶部隊に所属するのは工兵で、特に船舶工兵と称されていた。陸軍の上陸作戦や沿岸の輸送に用いられた上陸用舟艇は、主として大発という発動機付きの中型舟艇であった。筆者は、昭和17年4月1日に大阪陸軍幼年学校に入校して陸軍将校への第一歩を踏み出したが、その年の7月、和歌山県湯浅の海岸で実施された遊泳演習（海上訓練）では、水泳訓練のほか、和船の、いわゆる伝馬船の漕舟競争などもやらされたが、翌18年7月、和歌山県田辺の海岸での遊泳演習では、広島宇品から派遣された船舶工兵の操縦する大発に乗船し、夜間の沖合いに出て、海上浮遊、筏作りなどの訓練を行ったこともある。輸送船が撃沈された際を予想しての訓練である。また、輸送船から繩梯子で上陸用舟艇に移乗する訓練なども行った。当時、戦局はかなり逼迫してきていたのである。紀伊水道から南方戦線へ向かう船団は、同水道の出口に待ち構えている米潜水艦の魚雷攻撃を受けて沈没する船舶も多くなっていたとみえて、近くの海軍航空基地から下駄履きの水上機が飛び立って爆雷を投下し、その爆発音を耳にしたこともあった。

前記のように、陸軍船舶特別幹部候補生は、昭和18年11月に制度が設けられ、翌19年春には募集が開始され、中学3年修了程度以上の15歳から18歳の少年を対象に選抜試験が実施され、その年の6月には約1700名の第一期生が入隊している。入隊した場所は、香川県小豆島洲崎村（現土庄町）の船舶特幹隊であった。そして、僅か4カ月の短期間に海上挺身戦隊要員を速成するため、小豆島西方の秘匿基地・豊島で猛訓練を開始した。訓練基地は、後に広島県江田島の幸ノ浦に移されたが、昭和20年8月15日の終戦まで、1年4ヵ月足らずの間に第一期生から第四期生まで、約7000名が入隊し、第一期生から第三期生までは基礎訓練を終えて実戦配備に就き、第四期生は基礎訓練中であつた。しかも、第一期生の大半と第二期生の一部は、フィリピン、台湾及び沖縄作戦の海上挺進部隊として大活躍し、特攻戦死しておられる。

それより先、昭和19年4月、陸軍船舶司令部（広島市宇品）内で、鈴木宗作司令官以下関係者の間に、海上の防衛は航空部隊のみに任せることなく、船舶部隊自らの手で実施すべきだとの意見が強まった。そのため、簡単に軽量の攻撃艇を、予め敵の予想上陸正面

に配置し、奇襲によって上陸船団を側背から攻撃する着想を立て、野戦船舶本廠に舟艇の試作を、戦法等について船舶練習部にそれぞれ担当させた。また、これとは別に、大本営陸軍部でも、この目的のため、兵器行政本部と第十技術研究所に、肉迫攻撃艇の開発を命じていた。昭和19年7月、海軍の四艇と陸軍の試作艇の比較試験を行い、各種の要件を充たすことで、第十技術研究所の試作になる甲一型号を採用することに決定した。

この艇は、長さ5.6m、幅1.8m、排水量1.5トン、最大速度20ノット（36ノット）、航続時間3.5時間、250kg爆雷1個装備のベニヤ板製のモーターボートで、秘匿名称を連絡艇とした。

昭和19年8月、海上挺進戦隊10個戦隊の仮編成が小豆島の船舶特別幹部候補生部隊において完了、豊島におけるレの訓練が開始された。1個戦隊は、戦隊長以下104名、レ100隻をもって編成された。戦隊は、戦隊本部（戦隊長以下11名）と3個中隊（中隊長以下31名）からなり、更に中隊は、中隊本部（中隊長以下4名）及び3個群（各9名）とからなり、戦隊を戦術単位、中隊を戦闘単位とし、1個群（9隻）を行動の最小単位と定めた。戦隊

長には、すべて正規将校、即ち陸軍士官学校出身の若い少佐（51期・52期）及び大尉（53期・54期）を充て、中隊長には主として昭和19年7月少尉任官の陸士57期生を主体とし、そのほか陸士56期生（一部55期生）、幹部候補生出身の若い中尉又は少尉（幹候8期・9期）のうち、特攻を自ら志願する者が充てられた。群長（小隊長）には、第1ないし第10戦隊には、昭和18年12月に学徒出陣した幹部候補生第10期生を、第11ないし第30戦隊には同第11期生（いずれも船舶幹部候補生と一般幹部候補生からの出身者）及び同第12期の見習士官及び各地の陸軍予備士官学校等出身の見習士官が充てられた。一般隊員としては、第1ないし第19戦隊までは、船舶特別幹部候補生を充て、第20から第30戦隊には、その不足分を現役下士官及び下士官候補者や乙種幹部候補生から採用して充てられた。このように戦闘の主力をなしたのは、この年若い少年兵達であった。全軍から選抜された、この16歳から25歳の若き精銳達は、昼夜を分かたぬ猛訓練の後、昭和19年10月、30個戦隊の編成をもって、それぞれ最後の決戦場とされたフィリピン、台湾、沖縄に展開を完了した。このほか、本土決戦準備のため、更に第31〜53戦隊が編成ないし仮編成

された。

陸軍海上挺進隊の肉迫攻撃艇は、海軍の同種水上特攻艇震洋四が、艇首に250kgの爆雷を収納して衝突する体当たり攻撃方式であるのと違い、艇尾の投下装置に装着し、乗員の自動又は、衝突時の金具の作動によって投下し、爆発する方式になっていたが、敵艦艇に艇尾を衝突させて爆雷を投下しても4秒後には爆発するので、艇を反転させて避退することも、一旦後退して攻撃を反復することも至難の技であることが判明し、結局、体当たりによる特攻攻撃方法を探ることとなった。そして、主として夜間、上陸前の敵艦船への集中攻撃により、大打撃を与えてこれを阻止する戦法が採られることになった。

陸軍海上挺進戦隊は、困難な海上輸送を克服し、昭和19年末までには、敵上陸前に、その予想上陸正面に作戦展開を一応完了した。しかし、敵上陸点を的確に判断し、適切な作戦展開を実施することは至難の技であった。

昭和20年1月9日、米軍がフィリピン・ルソン島リンガエン湾に上陸を開始した夜、同地区のスワルに展開していた第12戦隊（戦隊長高橋功大尉・陸士54期）は、約40隻（一説では70隻）をもって出撃し、翌10日午前3〜4時

頃、米軍の輸送船及び上陸用舟艇を攻撃、多大の戦果を上げ、生存者は僅かに2名、他は全員特攻戦死した。米軍の資料に基づく戦果は（リチャード・ネオール著『特別攻撃隊』による）、

輸送船、LST上陸用舟艇など沈没6隻、大破2隻、破損8隻、計16隻で、日本側の発表した戦果、20ないし30隻の艦艇を撃沈又は大破、に近い損害を受けており、米軍艦艇泊地は大混乱に陥り、攻撃再興不能という、瞳目すべき戦果を上げている。この損失は、米海軍にとつて重大なものであり、比島南部に展開していた魚雷艇隊を至急北西方面に移動し、輸送船団泊地の防衛力増強を図った。米海軍はその直後から、改装した哨戒艇と航空機とで徹底した哨戒を開始し、また、レ特攻艇の秘密基地を破壊するため、特別部隊等を編成するなどして捜索に当たった。

昭和20年1月31日、米軍部隊がマニラ湾のやや南のナスグブ沖に上陸準備を開始した時、ナスグブ北西40kmの基地から第15戦隊第2中隊長上野義現中尉（陸士56期）の指揮する1個中隊が、またその南から戦隊の一部が出撃し、米軍船団泊地を攻撃したが、駆逐艦、哨戒艇等の警戒が厳しく、敵駆潜艇1隻を撃沈する戦果を上げたが、レ艇も大損害を受け、全員戦死した。2月2

日から15日までの間、第15戦隊及び第16戦隊の残部が散発的な攻撃を繰り返し、また、第11戦隊もマニラ南方のテルナーテ地区から、一部の艇で攻撃したが、戦果は未確認であった。

その後、米軍は、スプルーアンス海軍大将の率いる1500隻の艦艇と圧倒的な航空支援の下、第10軍司令官S・B・バックナー陸軍中将指揮の24万の上陸部隊をもって、昭和20年4月1日、沖縄本島西部の嘉手納海岸に上陸作戦を展開した。これに先立ち、米軍は本島西南地方の慶良間海峡は、米軍にとつて洋上補給と艦艇修理のための格好の基地となるため、3月26日に慶良間列島の攻撃を開始した。同列島には、レ部隊の第1ないし第3戦隊が展開し、敵上陸部隊の泊地侵入後、その背面から攻撃する計画であったが、出撃の条件未完のまま不意の襲撃を受けた。その上、各海上挺進基地大隊は、沖縄本島から台湾に転用された第9師団の後詰め部隊となり、その一部を残置して主力は既に本島に転進しており、対上陸作戦能力は微弱になっていた。ここにおいて、第32軍は、作戦全般に及ぼす影響を顧慮し、3個戦隊に対し、レ艇の破棄を下令した。

敵上陸部隊は、沖縄本島上陸に先立ち、上陸正面とその付近の特殊潜航艇

及び海上挺進攻撃基地を徹底して砲爆撃し制圧した。その砲爆撃に耐え、間隙を縫って3月29日第29戦隊の第1中隊長中川康敏中尉(陸士56期)以下17名が17隻のレで北谷西方の米艦船を攻撃し、中型艦1隻を撃沈、2隻を撃破し、16名が戦死した。米軍の資料によれば、レは発見され、激しい砲撃で輸送船に接近できない状態であったが、1隻が砲火を突破して520トンのLSM12に衝突し、船は中央に大穴を開けられ、応急修理したが4月4日に沈没した、と記録されている。

糸満付近に展開していた第26戦隊は4月7日(米軍資料では4月9日)、第1中隊20隻が出撃、第2中隊は岸本具郎中隊長(陸士57期)以下2隻がこれに連携して攻撃を実施し、駆逐艦1隻、輸送船2隻を撃沈ほかの戦果を上げた。米軍資料によれば、2050トンの駆逐艦チャールズ・J・バツジャーは、暗闇の中からレ艇の攻撃を受け、爆発により機関室に大浸水が起り、慶良間海峡まで曳航したが擱座し、再び戦闘に参加し得なかった。中型揚陸艦駆逐艦LSM89は体当たりを攻撃を受けたが、被害は軽微であった。また駆逐艦ポーターフィールドも被害を受けた。レ艇は全部沈められても、泳いでいる生存者が手榴弾をもって攻撃し

てくるので、射撃を続けねばならなかった、と記されている。

4月10日、第26戦隊第2中隊野田耕平見習士官以下10名が、各個攻撃を実施し、全員帰還したが、戦果は不明であった。

4月15日、第26戦隊長足立陸生大尉(陸士53期)以下22隻が、嘉手納西方海面の米軍艦船を攻撃し、駆逐艦1隻、艦種不詳3隻を炎上させ、そのほかに火柱6を報告した。米軍資料によれば、機雷掃海艇YMS31がレ艇の攻撃で大破した、となっている。

5月3日の第32軍の総攻撃に当たって、戦線左翼西海岸正面では、第27戦隊第1中隊、第28戦隊の主力及び第29戦隊の一部をもって、船舶工兵第2連隊の兵員を乗せ、那覇港を出発して大山付近に逆上陸を実施し、右翼東海岸正面では、第27戦隊の第2・第3中隊約20隻をもって、中城湾及び勝連半島付近の輸送船団を攻撃し、駆逐艦1隻、上陸用舟艇2隻、大型輸送船3隻を撃沈した。この戦闘で、戦隊長岡部茂己少佐(陸士52期)以下23名が戦死した。

4月27日、第26戦隊第1中隊は、12隻をもって嘉手納沖の艦船を攻撃し、輸送船1隻、駆逐艦1隻を撃沈した、と報告された。第28戦隊は、4月27日28日夜、第三中隊長小林浩三少尉(陸士57期)の指揮する2個群(23隻)をもって、具志頭付近から中城湾に出撃したが、戦果は不明であった。米軍資料では、4月27日、中城湾において、1隻のレ艇が、2050トンの駆逐艦ハッチンズを吹き飛ばした。レ艇の体当たりにより、艦は数フィート飛び上がり、左舷のエンジンとスクリュー軸が破損し、18名が負傷、艦は終戦まで使用不能となった。また、2日後に、ロケット砲艦LCS37は、体当たり攻撃を受け、艦は大破した、と記録され

ている。

5月3日の第32軍の総攻撃に当たって、戦線左翼西海岸正面では、第27戦隊第1中隊、第28戦隊の主力及び第29戦隊の一部をもって、船舶工兵第2連隊の兵員を乗せ、那覇港を出発して大山付近に逆上陸を実施し、右翼東海岸正面では、第27戦隊の第2・第3中隊約20隻をもって、中城湾及び勝連半島付近の輸送船団を攻撃し、駆逐艦1隻、上陸用舟艇2隻、大型輸送船3隻を撃沈した。この戦闘で、戦隊長岡部茂己少佐(陸士52期)以下23名が戦死した。

5月中旬、第28戦隊は、川島見習士官以下6隻で嘉手納沖に、5月23日、麻生少尉以下9隻で嘉手納及び那覇沖に出撃、5月27日には、第27戦隊の第1中隊が残存全艇で出撃を行ったが、戦果は確認されなかった。この出撃をもって海上挺進作戦は終了し、残存の戦隊員は陸上戦闘に参加、その殆どが戦死を遂げた。

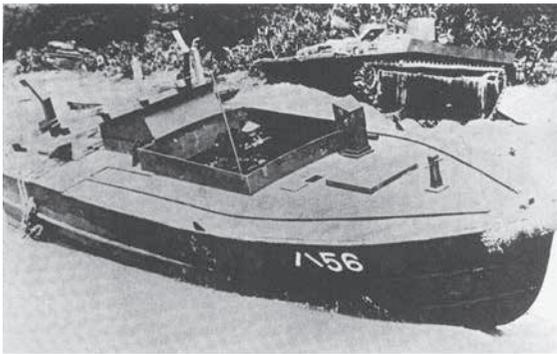
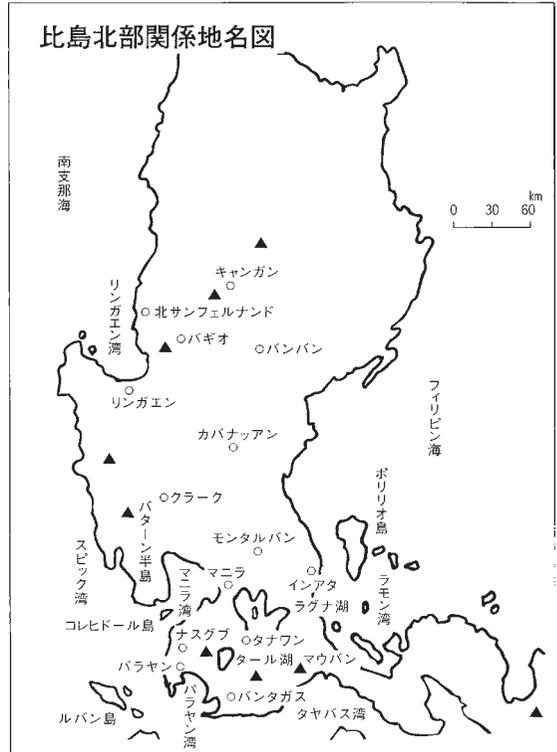
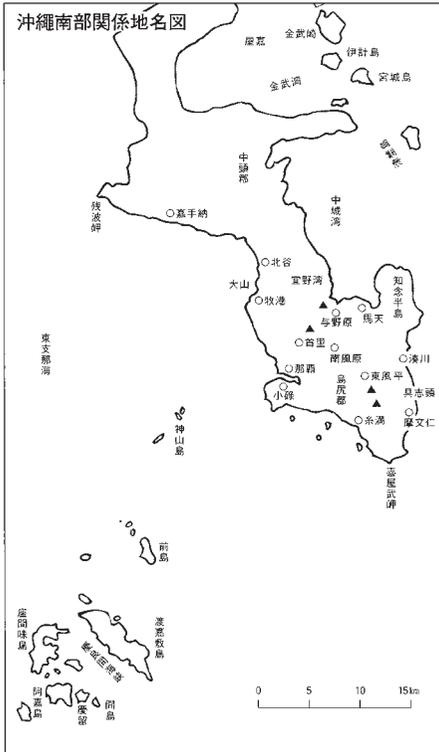
沖繩作戦の海上挺進作戦において、挺進戦隊は以上のように、身を捨てて決死敢闘し、数々の戦果を上げたが、多くの戦死者を出した。比島作戦以来、海上挺進隊の戦死者数は、1636名の多きに及んだ。

なお、肉迫攻撃艇レに関する事項及び沖繩における海上挺進作戦等につい

ては、当時、慶良間列島の渡嘉敷島に展開していた第3戦隊中隊長皆本義博中尉(陸士57期)に関する『特攻最後のインタビュー』(株ハート出版)及び『特攻 最後の証言』(株文藝春秋・文春文庫)に詳細記事が掲載されている。

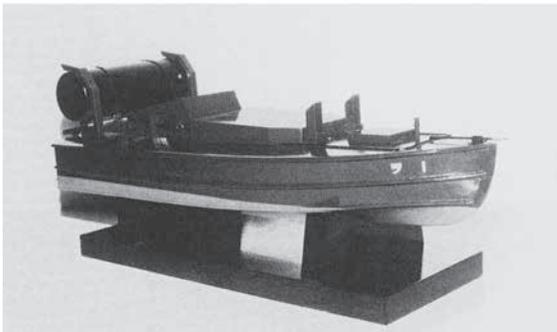
若潮会の靖國神社における慰霊祭は今年(平成25年)47回目であるが、同会では、船舶特別幹部候補生隊練習部のあった香川県小豆島に昭和48年、慰霊碑「若潮の塔」を建立し、5年に一度、その下に会して旧交を温めるとともに、戦没战友の御霊を慰霊しようとの誓いを守り、今も「若潮の塔」慰霊大祭を執り行っているが、今年はその建立40周年に当たるので、11月23日に合同慰霊大祭を執り行う予定とのことである。

靖國神社における若潮の会慰霊祭も小豆島における「若潮の塔」慰霊大祭も年々参列者が減少し、寥々たる有様になりつつあるとのことであるが、それでも、靖國神社における慰霊祭及び「アルカディア市ケ谷」における総会に各期から20名程の戦友相集い、戦没者を慰霊し、往時を偲び、未来を語るその絆の強さと情熱には、深い感銘を覚えた。



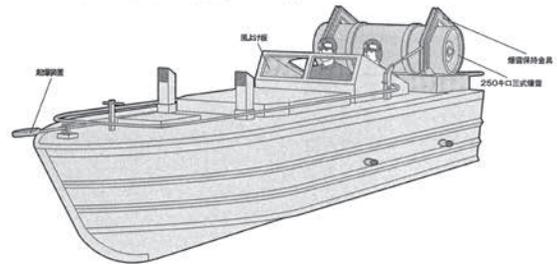
渡嘉敷島に打ち捨てられたマルレ

マルレの模型



マルレ (四式連絡艇/四式肉迫攻撃艇)

- 全長：5.6 m
- 全幅：1.8m
- 重量：1200kg
- 速度：20～24kts
- 発動機：85HP 日産A〇型ガソリンエンジン
- 武装：120kg 三式爆雷 × 2または250kg 三式爆雷 × 1
- 乗員：1名 (艇隊長及び各中隊長艇のみ2名)



特攻コラム (その四)

○特攻隊員を悼む (その四) — 第二御楯隊 —

前回、米軍のレーダー網を基幹とする組織的艦隊防空網及び近接信管の威力に対し、これ等を克服する方策を模索し、適用に成功した例として、関大尉の超低空接敵、パレルロール突撃の実例を紹介した。今回は、これに次ぐ実例について、説明したい。

関大尉に続く、空母撃沈の戦果を上げたのは、昭和20年2月21日、硫黄島海域を攻撃した第二御楯隊である。米軍側の発表で、護衛空母2隻撃沈破、正規空母(サラトガ)大破(以降戦闘不能)、防潜網輸送艦撃破、戦車揚陸艦2隻撃破の戦果を上げている。更に前にも記したが、米軍は軍籍にある艦艇のみカウントし、民間徴用船舶の損害は公表しないため、これ以外にかなりの数の輸送用艦船が撃沈乃至撃破の被害を受けているものと考えてよい。本攻撃の状況は、硫黄島からも遠望でき、19本の火柱が目撃されたと報告されている事から、特攻隊の戦果として最大のものであったと考えられる。

この第二御楯隊の攻撃を説明するに

当たっては、最後に残った空母部隊の601空艦隊隊長肥田真幸さんに触れなければならぬ。肥田さんは、海兵67期出身、生粋の艦攻乗りで、筆者の尊敬する先輩である。何回も死線を歩みながら生存され、海上自衛隊では、航空集団司令官まで昇りつめられた人物である。肥田さんは昭和18年、24歳で海軍最年少の飛行隊長を命ぜられてインドネシア方面で活躍され、8カ月後の昭和19年2月、戦況厳しいトラック諸島楓島に進出、散々な悪銭苦闘の末、全機を失い、航空隊解散、飛行隊消滅を経験される。奇跡的に放棄されていた月光を緊急修理し、グアムから最後の撤退機として生還する。初めて操縦する月光、しかも武装を取り外し、生き残った整備員15名を鮎詰めにして飛行したというのであるから、大変な逸話の勇士である。その後内地の香取、横芝を根拠地に天山飛行隊長として決戦に備え、戦力拡充に努められた。肥田さんは、特攻隊には反対で、「特攻を命ずる前に、飛行隊に攻撃命令を出して欲しい、必ずや特攻攻撃以上の成果を上げて見せる」という持論であった。折から(昭和19年末)大量養成の新人が多数配分される中、徹底的な集中訓練で錬度を上げ、自信を持っておられたようである。肥田さんの戦法は、

トラック方面での貴重な経験と、雷撃機という特殊な運用法から、暗薄暮、超低空、肉薄雷撃が最良の運用法とするもので、訓練もほとんど夜間訓練であった、と回想しておられる。肥田さんの要望にも拘わらず、601空は、昭和20年2月20日(実動は天候により21日)、零戦・彗星・天山による戦闘・艦爆・艦攻連合の特攻攻撃を命ぜられる。第二御楯隊である。目標は、硫黄島沖合いの空母群で、肥田さんは先任飛行隊長として出撃を熱望されるが却下され、次席の彗星飛行隊長村川大尉(海兵70期)が指揮官となって出撃する。攻撃成功のポイントは、4点である。第一点は、攻撃目標の位置が非常にはっきりしており(硫黄島から視認可能)、綿密な計画・行動がとれたことである。第二点は、空母艦隊群のレーダー網を避けるため、最終発進基地八丈島から直進せず、大きく東方向に迂回し、攻撃を予期して待機している米戦闘機による迎撃を最小限に止めるのに成功したことである。第三点は、彗星攻撃隊は、米軍機が着艦に多用する午後の時間帯、折からの下層雲を利用し、艦艇による対空砲火を局限し、雲間より奇襲することが出来たことである。第四点は、天山隊が、かねてより錬度を積んだ戦法、暗薄暮攻撃を成功

させたことである。天山隊の突入時刻は、午後6時前後、日没後40分ぐらいで、西に位置する艦艇側からは見えないうが、東から攻撃する雷撃機からは、まだ艦艇を視認できる絶好の時間を選り、大戦果を上げたものである。将に理詰め行動で、然るべき成果を上げたと言える。しかし問題点もあった。それは、雷撃機の特徴として、海軍最大の対艦兵器である800kg魚雷を積んで出撃するのであるが、魚雷は爆弾と異なり発射後浅水面下を自力走行し、水面下で命中し船底部を破壊する。したがって、艦艇側は被害が大きく、一発よく大艦を葬るとされている。艦攻機が雷撃武装で出撃する場合、直接体当たりでしたのでは、魚雷は単なる爆発物(炸薬量は2、3kg)と化し、破壊効果が減ずる。間違いなく命中する至近距離で発射に成功した場合、発射母機は目的を達し、帰投できれば再攻撃が可能である。特に第二御楯隊のように、日没後の攻撃に成功した場合、追撃される可能性は少ない。帰投できれば再攻撃が可能である。肥田さんの手記では、本件は大きな問題として討議されたが、一心同体の彗星隊が体当たりするのだからと、最終的に納得し、雷撃成功後、徒手空拳で体当たりしたようである。零戦隊も直衛任務終了後、



昭和20年2月21日朝出撃直前に、香取基地で指揮官の訓示を受ける第二御楯隊の隊員達。背後に魚雷を装着した艦上攻撃機「天山」が見える。

掃投し爆装転換して、再攻撃すると記されており、雷撃機の運用法には、戦闘目的に釈然としないものを感じるのは、筆者だけではあるまい。

写真は、出撃直前の第二御楯隊を、翌々日(2月23日)毎日新聞が報じたものである。香取基地列線で、出撃する隊員と訓示をする村川隊長、そして見送る残留の搭乗員であるが、よくある特攻隊の出撃風景の悲壮感よりも鍛えてきた技量、成果を發揮せんとする自信に溢れた闘志を感じる。何とも言

えない迫力である。

硫黄島は、日米両軍の最激戦地である。栗林中将(戦死後大将)率いる小笠原兵团(109師団、海軍27航空戦隊主幹)の奮戦により、作戦による死傷者数は、米軍の被害が日本軍を上回る唯一の例となった。因みに米軍の被害2万8000名は、第二次世界大戦最大の陸上作戦であったノルマンジー作戦の被害を上回るので、米軍上陸作戦史上最大の被害であった。硫黄島作戦は、来たるべき台湾又は沖繩戦に備え、航空兵力の投入はごく僅かに留まり、特攻隊の投入も第二御楯隊のみであったことから、小笠原兵团の徹底した塹壕作戦にも拘わらず、玉碎する。肥田さんの考えていたような周到かつ執拗な航空攻撃が行われれば、米軍被害の更なる増大、沖繩上陸作戦への重大な影響等が考えられるところである。

陸軍の特攻攻撃は、肥田さんの暗薄暮攻撃論と同様の傾向が見られる。ルソン島上陸作戦に任じた米軍司令官の報告に「夕闇が迫ると、(米軍)兵士は、執拗な特攻攻撃に悩まされ、ノイローゼになった、更なる艦隊防空戦力の増強が必要である」

とあるように、薄暮の利用でかなりの効果を上げたと考えられる。義烈空挺隊も、鈍重な重爆を以て強行着陸に成功している。義烈空挺隊は、熊本の本軍基地を離陸し、重爆の長い足を利用し、遙かに東方海上に進出、超低空で夜間の読谷飛行場に進入、着陸したもので、厚い艦隊防空網を避けるため、考え抜かれた方法であったと考えている。このように、前線各部隊にあっては、それぞれの部隊に應ずる工夫、戦法があり、効果を期待できるところは、多々見られるところであるが、捷号作戦終焉後は、作戦遂行能力は急激に減衰、特に生命線たる燃料の枯渇が目に見える状況となった。そのため、沖繩戦を最後の機会として、無謀と見える特攻出撃を強行することとなったのは、前線の出撃隊員にとっては、真に痛ましい結果となり、改めて追悼の念を深くするものである。

(ペンネーム・蒼蒼子)

平成25年10月31日(木)、埼玉県護国神社での「特攻勇士之像」の建立除幕式の後、白田智子理事の案内で、「熊谷陸軍飛行学校桶川分教場」跡の見学を、当顕彰会が主催する研修会の一端として実施した。

熊谷陸軍飛行学校桶川分教場は、昭和12年6月に開設して以来、少年飛行兵や特別操縦見習士官など、約1600名の飛行兵を輩出してきた。白田理事の父君である伍井芳夫大尉も、同校の教官を務められ、昭和20年4月1日に、第23振武隊長として、沖繩特攻作戦による戦死者の最高齢である32歳で散華されている。現存している旧兵舎内には、伍井大尉が愛児に宛てて残された遺書を始め、飛行兵の日誌や遺書が多数展示されている。最後は引揚者の寮として使用されていたが、平成19年4月から無人となった。建物を取り壊し、土地を国に返還することになっていたが、ここまで完全な状態で、木造兵舎が残存するのは稀な事であり、取壊しを惜しんだ当時を知る方々が、白田理事を会長に、「旧桶

桶川飛行学校跡見学研修会報告

評議員 及川 昌彦

川飛行学校を語り継ぐ会」が結成され、1万人以上の署名を集めたことにより、桶川市の所管で保存されることになった。

この度、杉山理事長以下衣笠専務理事と小倉理事他当顕彰会役員の間々が見学することとなった。当日は、小野克典桶川市長のお迎えを受け、「東の知覧」として、今後発展させていきたい、との力強いお言葉を伺った。隣接するホンダエアポートで行われていた軽飛行機の発着訓練に、当時の飛行士の訓練風景が偲ばれた。

兵舎内は、当時の整備兵だった方にご案内していただいたが、木造で老朽化が進んでいるため、注意して歩かないと、床を踏み抜きそうであった。日没で真っ暗になってしまったので、後ろ髪を引かれる思いで退出した。次回は、午前中からじっくり見学したいと思う。土曜・日曜・祝日は一般公開して、語り部も待機しておられるので、再度研修会を企画する予定である。

「旧桶川飛行学校を語り継ぐ会」のホームページは次のとおりである。
<http://www.okegawa-hiko.jp/>

《読者の声》

管見・民族史上最大の危機

諸永 次郎

(神奈川県・元教員・83歳)

◎管見

戦後GHQが課した「手枷、足枷」を外すのは、今しかない。現憲法の前文には奇怪、奇妙なる文言が入っている。

それは、「世界の平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼してわれらの安全と存在を保持しよう」と決意した」とあることよ。われら日本人が近隣国民に命乞いをするかの如き意思表示だ。憲法第九十六条の改正と同時にこの憲法前文の廃棄を断行することを渴望する。現状のように、衆議院で三分の二を確保するのさえ容易なことではない。その条件を満たした上で更に、参議院でも三分の二の確保をしなくては憲法改正の提案すらできないのだ。戦後、参議院でも三分の二を実現しようではないかと、国民世論が盛り上がったことが、私の記憶では一回ある。池田内閣の所得倍増提案以前のことだったと思う。朝日新聞等の左翼マスコミや教職員組合などが一斉に反発してその機

会をつぶしてしまった。

今回はそれ以来の貴重な機会なのだ。安倍総理には、本当の日本人なら反対のできない前記事実を前面に打ち出して憲法改正を実現して欲しい。

(注)GHQが命じた憲法前文の該当箇所
 の原文は次のとおり。

“We have determined to rely for our security and survival upon the justice and good faith of the peace-loving peoples of the world.”

世界の平和を愛する方々の正義心と慈悲心を頼りにしてわが身を守り生き残って行こうと決心致しました(一)のでよろしくお願ひします。(平成25年7月4日記)

◎民族史上最大の危機

去る八月六日付け産経新聞によれば、全日本仏教会理事長の小林正道師なる方が、安倍首相に対して、八月十五日の靖國神社への参拝はなさらぬように申し入れられたとのこと。私自身は理事長の属される浄土宗の門徒ですが、理事長のお言葉は適切さを欠いていると存じます。

日本の戦後七十年近くにもなった今日、アメリカでなら、アーリントン墓地に当たる、我が靖國神社に国の首相が参拝されるのに対し、近隣の国がと

やかく申すのがおかしい。また、言わせる余地を与えるのが間違いです。真つ当な日本人ならこう考えます。そうでなければ日本の独立はあり得ません。

日本仏教僧侶の方々は、神道の神主さんと共に、日本民族の精神世界の先導者であられる方々だと思つて来たのですが、あまりにも国民から乖離したお考えでは、我ら日本人はついていきません。隣国中国は共産主義の国家であるだけでなく、時代が代わる度に先祖の墓をも掘り返して、先人の非を咎め続ける、易姓革命の国なのです。そんな国に席巻されたら、日本での先祖供養など出来なくなるでしょう。

今日の日本民族は、あの「元寇襲来」以来の危機に瀕しています。大部分の日本人は、戦後GHQが行った洗脳での麻痺状態の中にあり、それが見えなくなっているのです。元寇を迎えるに当たって当時、武士と共に僧侶も神主さんも一丸となって立ち向かったと言われる。これに反し今日、国の枢要な地位にある方々ですらこの危機が見えなくなっていることこそが、我が民族史上最大の危機にあることは明白です。近代の戦では思想戦に重点があると言われます。中国は今、不正義もものかわ、その思想戦を仕掛けているのです。(平成25年8月27日記)

新刊図書紹介

① 著者「特攻最後のインタビュー」
制作委員会（責任編集・神崎夢
現、長尾栄治）



『特攻 最後のインタビュー』

先に、当顕彰会会報『特攻』第98号に同封の案内書に記載のとおり、会報『特攻』第82号（第1回前編）から第97号（第10回）まで、10回、11号（証言者11名）にわたって連載した「特攻・特攻インタビュー」と題する記事が、この程書籍化され、株式会社ハート出版から刊行された（平成25年12月21日）。当顕彰会の会員でもある、イラストレーター神崎夢現氏の責任編集の下、同じく会員で、映画監督・脚本家でもあり、インタビューアーを務めた長尾栄治氏の協力によって、映像、イラスト、解説・注記を加え、内容も再度証言者の校閲を得て改訂を加えるな

どして、刊行された。内容については、既に会報『特攻』により御承知のことではあるが、できるだけ多くの人に特攻の真実を知っていただくため、御一読の上、御推薦いただきたい。
なお、会報『特攻』掲載関係は、次のとおりです。

- 第1回・陸軍航空特攻・前村 弘氏
（前編）会報『特攻』第82号
44～53頁掲載
- （後編）同 第83号
19～30頁掲載
- 第2回・陸軍航空特攻・中村 真氏
会報『特攻』第84号31～53頁掲載

- 第3回・海軍航空特攻・江名武彦氏
会報『特攻』第86号36～52頁掲載
- 第4回・陸軍航空特攻・久貫兼資氏
会報『特攻』第87号24～38頁掲載
- 第5回・陸軍水上特攻・皆本義博氏
会報『特攻』第88号38～56頁掲載
- 第6回・陸軍航空特攻・堀山久生氏
会報『特攻』第89号25～38頁掲載
- 第7回・海軍航空特攻・野口 剛氏
会報『特攻』第91号27～46頁掲載
- 第8回・海軍航空特攻・粕井貫次氏
会報『特攻』第93号7～20頁掲載
- 第9回・海軍水中特攻・
海老澤善左雄氏

特攻の記憶後世へ



元隊員11名の証言集を出版

太平洋戦争の元特攻隊員の記憶を後世に伝えようと、杉並区の映像ディレクター長尾栄治さん(46)が集めた証言集「特攻 最後のインタビュー」(ハート出版)が先月、出版された。長尾さんの勤める映像制作会社では、戦争体験者の証言によるドキュメンタリー映画を作っており、長尾さんは「高齢化している元特攻隊員が早く話を聞かなければならない」と、京都市の編集者神崎夢現さん(59)らとも企画した。取材に当たった元特攻隊員は11人。重爆撃機や戦闘機のほか、潜水服を着ての入間機雷」まで、担当した兵

命じられるまでの経緯や攻撃時の様子を詳細に話している。「何百万人の日本人が死んだ。特攻までして死なせた日本の軍隊、そして戦争をしないためにはどうすればいいの、若い方々に考えてほしい」などと、後の世代に向けた思いも吐露している。
取材は2009年6月から10年6月にかけて行われ、元隊員は当時既に80歳を超えていた。長尾さんによると、取材後2人が亡くなったという。
長尾さんは「今の日本は戦争の時代をまた人たちの経験が土台になっている。これからの時代に流されないためにも、元隊員たちの証言は過去から学ぶ教材になる」と話している。
A5判、388ページ、2100円(税別)。

②

黄文雄 著



著者は昭和13年（1938年）台湾生まれ。昭和39年（1964年）に来日し、早稲田大学商学部を卒業、明治大学大学院修士課程修了。「中国の没落」（台湾・前衛出版社1991年）

会報『特攻』第95号22～31頁掲載
第10回・海軍航空特攻・岡本鐵郎氏
会報『特攻』第97号16～28頁掲載
また、本年1月22日の読売新聞朝刊（都民版）に次のような記事が掲載されたので、御参考までに転載します。
○発行所「株式会社ハート出版」
〒171-0014
東京都豊島区池袋3-9-23
TEL 03-3590-6077
FAX 03-3590-6078
定価 本体2100円＋税
(A5判・383ページ)

が大反響を呼んで以来、旺盛な執筆・評論活動を展開しており、次々と問題作・話題作を世に問うている。平成6年(1994年)、巫永福文明評論賞、台湾ペンクラブ賞受賞。日本、中国、韓国など東アジア情勢を文明史の視点から分析し、高く評価されている。著書に17万部のベストセラーとなった『日本人はなぜ中国人、韓国人とこれほどまで違うのか』『世界から絶賛される日本人』『韓国人に教えたい日本と韓国の本当の歴史』(以上(株)徳間書店)『韓国は日本人がつくった』『近代中国は日本人がつくった』『満州国は日本の植民地ではなかった』『日中戦争は侵略ではなかった』『台湾は日本の植民地ではなかった』『複合汚染国家』中国『黄文雄の大東亜戦争肯定論』(扶上ワック(株))『もしもの近現代史』(扶桑社)など多数。

本書は、副題として「カミカゼ」が世界の歴史を大きく変えた!世界が驚き、絶賛した特攻の精神」とあるように、世界的な観点から特攻並びに特攻精神を捉えており、非常に明快な論理を展開している。本書は第一章世界から尊敬される特攻隊、第二章特攻隊の真実、第三章それでも日本人は特攻を選んだ、第四章アジアを解放した特攻精神、の四章に区分して論じてい

るが、その主な内容は、アジア各国で尊敬され、感謝される特攻隊、敵国アメリカも日本人の殉国精神を畏怖していた、「真に偉大な行為」とまで激賞したフランスの文豪、特攻隊に感動し、記念館を設立したフィリピン人、日本の特攻精神がアジアの独立を促した、若者たちはなぜ特攻に自ら志願したのか、日本人にしかできない特攻という「奇跡」ほかである。

著者はその「はしがき」で、特攻について、次のように要約して述べている。「・・・特攻は、西洋人を驚嘆させ、日本人のイメージを大きく変えた。特攻を受けた米兵も、またそれ以外の西洋人も、これを行った特攻隊員に敬意の念を抱き、日本人にしかできないのだと論じた。そればかりではない。死をもって国に殉じるといふ特攻隊員の精神は、それまで数百年にわたり西

えることは難しい。

特攻とは何だったのか、なぜ日本人は特攻という道を選んだのか。何も知らない中国や韓国の言論人は「日本の軍国主義に洗脳された」「犬死にだった」と蔑んだ論調で特攻を語ることが多い。大中華も小中華も、2000年もの間受け継いできた儒教の影響が大きく、極めて世俗的で実利的な民族であるため、そう考えるのも無理はない。

だが、戦後の日本でも、中国や韓国に同調して日本を貶める反日日本人や、戦前の日本をすべて否定する自虐史観が猖獗を極めてきた。台湾人の私からすれば、たつた一度負けただけで、なぜこれほど変わってしまったのかと残念でならなかった。それでも、終戦直前に散華された勇敢な若者たちを思い出すたび、日本の未来に希望と期待を持ったのも事実である。

私は戦争や特攻をいたずらに賛美したいわけではない。避けられるならば、戦争は避けたほうがいいに決まっている。だが、戦わざるを得ない運命、そして負けることが分かっている、命を賭して立ち向かわなければならぬ状況というものもあるはずだ。日本は明治維新後、日清、日露、日米と、自国より大きな国と戦争をせざるを得なかった。その事実だけでも、近代の日

本がいかに苦難の道を歩まざるを得なかったか、分かるはずだ。・・・アジアは中国と韓国だけではない。実に多くのアジア各国が、先の戦争で日本が果たした貢献を称え、特攻についても賞賛を送っている。アジアの多くの国々は、「日本に悪かった点があるならば、それは戦争に負けたことだけだ」と考えているのだ。そのことは本書で確かめてほしい。・・・

かつては「国を愛する」ことを表明するだけで、右翼というレッテルを貼られたものだったが、最近では若者たちが積極的に愛国を論じ、日本人としての誇りを再確認しようとしている。多くの人が「特攻」について関心を持ち、国のため、家族のため、子孫のために死を惜しまない若者がいたことを知れば、更に世界から敬愛される日本人になれるはずだ。本書を書いた目的はそこにある。・・・本書が日本人の「誇り」と「歴史」を取り戻す一助になれば、望外の喜びである。」

○発行所「株式会社徳間書店」

〒105-8055

東京都港区芝大門2-2-1

電話編集03-54403-4344

販売048-451-5960

定価 本体1000円+税

○会報『特攻』第100号 記念特集等について

当顕彰会の機関誌・会報『特攻』も、本年5月号をもつて第100号の節目を迎えることになりま
す。編集部では、これを記念し、別冊付録として第1号から第100号までの総索引を発行する予定にしておりますが、そのほか本誌についても、これを記念して会員各位の、当顕彰会に関する思い出、特攻に関する史実、語り継いでおきたい事柄、会報に関する思い出、感想、ご意見等の特集として掲載したいと考えますので、長短に拘わらず、奮つてご寄稿願います。ただし、長文の場合は、分割又は一部割愛して掲載する場合もありますので、ご了承願います。なお、投稿要領等は、本誌末尾(40ページ)記載のとおりです。また、締切日は、本年3月末日とします。

○平成26年度慰霊行事予定(会報『特攻』第98号8ページ掲載)の訂正(変更)について

③の慰霊祭の日時(26・4・4(金)を26・4・7(月)に訂正(変更)します。

靖國彩管奉仕会の略歴

評議員(陸士61期)
中江 仁

(注・文中敬称略)

一 中江 仁が旧財団法人特攻隊 戦没者慰霊平和祈念協会に 関与の経緯

1 中江は、昭和時代から長期にわたり陸士61期生会区隊幹事を務めていたが、当時、協会の幹部は、会長瀬島龍三(陸士44期)、理事長最上貞雄(陸士54期)、事務局長木村元正(陸士61期)、事務局次長栗原宏(空自OB)であった。事務局長の木村元正も陸士61期生会の区隊幹事で、予て協会への協力方を要請されていた。中江は、平成6年6月に埼玉県越谷市の第三セクターの取締役を退任したので、木村との約束を果たすため、協会に入会し、同年9月23日の世田谷山観音寺での特攻平和観音年次法要の際、同期生松本武仁画伯の特攻関係の油絵の展示作業を手伝ったのが振り出しである。陸軍関係の絵は、松本が当日の朝、収納先の靖國神社から運搬し、海軍関係の絵は、前日、市川氏が自宅に持ち帰り、当日の朝、観音寺へ運搬した。

2 靖國神社の社報『靖國』(やすくに)第605号にも掲載されているが、借

行生涯学習塾主催の特別攻撃隊資料展「特攻散華」では、靖國神社から、前代未聞・空前絶後とも言える特別のご配慮により、遊就館展示中の貴重な絵画、写真、遺品等82点を貸し出していただいた。当時の担当部長は、現小方孝次権宮司である。

また、習志野の陸自第一空挺団の資料館から、奥山道郎義烈空挺隊長(陸士53期)の遺書、隊員の血書、松本武仁画伯の油絵等34点を、田中賢一元少佐(陸士52期)の斡旋で借用し、展示した。

二 靖國彩管奉仕会の発足

1 靖國神社境内の神門の外側から第二鳥居の間で、全国戦友会連合会東京本部(略称・戦友連)の会員による、総理の靖國公式参拝促進の署名運動と連携して、同所に松本・伊藤画伯(市川氏)の陸海特攻戦没者の油絵を、アルミ製の架台に吊るし、伊藤氏書の遺書を立て掛けて展示し、参拝者の閲覧に供した。また、毎週の日曜日、春秋の例大祭、みたままつりに展示した。

なお、世田谷山観音寺での特攻観音年次法要では、本堂の欄干に吊して展示した。

2 前記戦友連の運動と分離してから、会の名前を、田中賢一元少佐が、靖國彩管奉仕会と命名して発足し、松

本画伯に会長になるよう進言したが、彼は「俺は絵を描くだけ、展示の指導その他一切の全権を任せる、頼むから貴様が会長を引き受けてくれ」と懇願するので、中江が会長を引き受けた次第である。

3 平成14年3月31日に、松本武仁画伯が逝去したが、逝去後も「靖國彩管奉仕会」という会の組織は存続し、絵画や書の展示は、靖國神社や世田谷山観音寺で続行した。会のメンバーは、次のとおりである。

中江 仁(陸士61期)

伊藤直之(故人元加藤隼戦闘隊員)

中島 剛(陸士61期)

関口正高(陸士61期)

神崎美恵子

中江トヨ子

(展示の協力者)

倉林和男(故人・英霊にこたえる会連)

赤木 衛(JYMA理事長・他学生会員
営委員長・事務局長)

三 結

1 平成19年3月、靖國神社管理課長から突然、「参道右側を整備して防災施設を完備するので、戦友連は左側に移転するように、靖國彩管奉仕会は活動を中止し、全品引き揚げるように」と申し渡されたため、残念ながら一切

を引き揚げたが、何かの事情で、工事は手付かずのまま、当時の状態で放置されている。

2 生前、松本画伯との話で、展示が可能となった場合は、前々から交流のあった那須の戦争博物館の栗林白岳館長に預けて展示を続行してもらおうという約束が出来ていたので、平成19年9月25日に栗林館長が受け取りに来て、

平成25年度理事会及び評議員会の実施報告等

事務局長 羽瀨 徹也

一 平成25年度理事会及び評議員会の実施報告

昨平成25年11月26日(火)に、当顕彰会事務室において理事会が、及び同年12月10日(火)に、靖国会館において評議員会が、それぞれ開催され、別掲の平成26年度事業計画及び収支予算(案)が審議され、いずれも平成26年度計画として承認されました。

なお、理事会及び評議員会においては、昨年から実施されている当顕彰会の全体委員会による事業計画の策定及び実施結果等について、衣笠専務理事から説明が行われました。

また、一身上の都合により、評議員

トラックに積み込んでいる最中に、「英霊にこたえる会」の当時の倉林事務局長が来て、靖國カレンダーに絵を使いたいということで、11点の油絵を「英霊にこたえる会」に預けたが、彼の生存中には、ただ1点のみ利用されただけで、その後は彼の意向が忘れられたのか、遊就館の地下倉庫に預けっ放しになっていた。もつとも現事務局長は、

中村家久氏が辞任を申し出られたため、現在の評議員は次のとおりとなりました。

秋山 政隆	穴山 正司
飯田 正能	石井 光政
石井 千春	及川 昌彦
太田 兼照	大穂 園井
倉形 桃代	高嶋 博視
中江 仁	新垣 敬輝
根木 東洋	早川 雅彦

なお、新しい事業として、昨年から当顕彰会内に「特攻ライブラリー」を新設・整備中ですから、会員の方で特攻関係の蔵書等をご寄贈頂ける方がおられましたら、事務局宛着払いでお送り下さるようお願いいたします。

二 「特攻顕彰会バッジ」の頒布について

当顕彰会の理事会及び全体委員会等

当時倉林事務局長の後任として見習い中であった。

その後、右の油絵は、平成24年11月26日に引き揚げ、当顕彰会の事務所に預けて現在に至っている。

3 過日、靖國神社の山口、小方両権宮司に、油絵を参集殿に展示したい旨申し出たところ、両権宮司から、油絵を神社に奉納してほしいとの申し出が

の総意により、別紙(会報「特攻」第99号に同封送付)記載のとおり「特攻顕彰会バッジ」を作成し、会員各位に頒布する(頒布価格は、送料込み1個当たり千円)こととしました。同バッジの頒布を希望される方は、「郵便払込取扱票」(会報「特攻」第99号に同封送付)の該当欄にご記入の上、お申し込み下さい。来る3月30日(日)の合同慰霊祭当日までにお手元に届くよう送付したいと考えていますので、お早めにお申し込み下さい。

三 第35回特攻隊合同慰霊祭の開催について

会報第99号に「第35回特攻隊合同慰霊祭御案内」を同封しておりますが、会員の皆様方のみならず、ご家族、お知り合いの方などお誘い合わせの上、多数ご出席下さるようお願い申し上げます。

あった。中江は、故松本画伯も誉れに思うだろうと考えて、申し出を受け入れた。その時、山本眞吾遊就館館長も陪席していたが、絵画の奉納の申し出に暫く待ってくれとのこと、現在も当顕彰会事務室のロッカーに預けている状況である。 以上

ます。

出席される方は、同封の「郵便払込取扱票」にご記入の上、お申し込みください。なお、懇親会費用は、前回より千円低額の四千円となっておりますから、念のため申し添えます。

- ① 慰霊祭の日時・場所
平成26年3月30日(日) 靖國神社
参集殿・集合完了 10時45分
慰霊祭 靖國神社拝殿・本殿 11時～12時
- ② 懇親会の場所・時間
靖国会館2階 12時30分～14時

- ③ 会費
慰霊祭及び懇親会出席者 六、〇〇〇円
慰霊祭のみ出席者 二、〇〇〇円

※なお、案内書にも記載してあります。

すが、前回に引き続き慰霊祭及び懇親会終了時に、最寄り駅までの送迎バスを運行しますので、ご利用の方はお申し込み下さい。

四 平成26年度年会費の納入について

平成26年度会費を納入していただくために、会報『特攻』第99号に「平成二十六年度会費納入のお願い」を同封しておりますので、同封の「郵便払込取扱票」により納入して頂くよう、よろしくお願いいたします。

なお、会費欄の上に入金済みと表示してあります方は、既に領収済みですから、お納めいただく必要はありません。



○ 平成26年度事業計画

一 方針

当公益財団法人特攻隊戦没者慰霊顕彰会（以下「顕彰会」という。）は、特攻隊戦没者の慰霊顕彰を主たる事業として各種公益目的事業を推進する。

この際特に、顕彰会の組織の強化並びに中核会員の特攻隊に関する資質及び行動力向上のための施策等により、顕彰会活動全般の活性化を図る。また、若者を含めたより幅広い階層を対象とした広報及び全会員による募集活動等

により会勢拡充を図る。

二 各種実施事業

1 慰霊・顕彰事業

ア 顕彰会が主催する、3月30日

（日）の靖國神社における特攻隊合同慰霊祭の実施、及び世田谷山観音寺が主催する、9月23日（月）の同寺における特攻平和観音年次法要の支援を行う。

イ 国内外の他慰霊団体が実施する

特攻隊戦没者関係慰霊祭等には、積極的に参加又は協力する。この際、陸海軍のバランス及び特攻作戦の種別等を考慮するとともに、当該慰霊祭等の実情の把握、全国慰霊祭等の情報収集に努める。

ウ 会員に対し、特攻隊に関する勉

強会、講習会、研修会等を実施し、慰霊・顕彰事業に資するとともに、会員相互の特攻隊に関する資質の向上を図る。

エ 月例法要（月例参拝）

特攻隊員の慰霊・顕彰及び「特攻平和観音」関連知識の向上のため、世田谷山観音寺が毎月実施する特攻平和観音月例法要に積極的に参加する。この際、一般の参加者等に対する募集・広報にも留意する。

2 募集・広報事業

ア 募集

広報活動と一体化した効果的な募集活動により、会員の獲得に努める。この際、各地慰霊祭会場等における募集・広報活動、若者向けホームページへのリニューアル、入会案内ページの充実、他慰霊団体HP等関連サイトとのリンク化に着意する。

イ 広報

① 歴史的資料として、また、特攻隊の功績を国民に広報・普及・継承するための広報誌として、会報『特攻』を発行し、全会員に配布するとともに、会員以外の希望者に頒布する。

② 平成25年度に新たに設置した

「会報編集委員会」及び「会報の編集・発行について（試行案）」に基づき、平成26年度において、公益法人に相応しい発行態勢・要領・記事内容であるかどうか等を検証し、平成27年度から施行する。

③ ホームページ上に、会報『特攻』

の内容を公開するとともに、可能な範囲で特攻隊戦没者に関わる慰霊祭情報等を掲載し、広報する。また、法令に定められた当顕彰会の運営状況等の情報を公開する。

3 「特攻勇士之像」建立事業

護国神社等へ「特攻勇士之像」を奉納する事業を継続する。このため、像の受入れ可能な護国神社、維持管理のための奉賛会等についての情報を収集し、建立事業を推進する。

4 特攻隊関係資料の収集・整理・保管事業

特攻隊及び特攻隊戦没者等に関する史実の調査及び研究資料等の収集を行う。この際、可能な限り、特攻関係者からの直接聴取、各地の慰霊祭・資料館等での資料発掘等に努め、記録に残す。また、平成25年度におおむね整理された「特攻ライブラリー」の更なる充実・活用を図り、会員の資質向上に寄与させる。

三 全体委員会事業

1 顕彰会の事業は、全体委員会が計画・実施する。全体委員会は、平成25年度末の全体委員会の態勢をもって、引き続き顕彰会の業務執行の中核機関として活動する。

2 全体委員会内の各委員会を廃止し、委員長（専務理事）及び事務局が主体となって事業の全般計画を作成し、各事業ごとに担当（補佐者・指導者）を指名し、当該事業を実施させる。

(公財) 特攻隊戦没者慰霊顕彰会
平成26年度正味財産増減予算書

平成26年1月1日から平成26年12月31日まで

(単位:円)

科目	予算額	前年度予算額	増減	備考
I 一般正味財産増減の部				
1 経常増減の部				
(1) 経常収益				
① 基本財産運用益	6,853,000	7,825,000	△ 972,000	債権受取利息減少
② 特定資産運用益	447,000	185,000	262,000	
③ 年会費	4,600,000	4,500,000	100,000	
④ 慰霊事業益	2,440,000	2,700,000	△ 260,000	
⑤ 出版事業益	90,000	130,000	△ 40,000	
⑥ 受取寄付金	2,700,000	2,000,000	700,000	
⑦ 雑収入	10,000	50,000	△ 40,000	
経常収益計	17,140,000	17,390,000	△ 250,000	
(2) 経常費用				
慰霊祭懇親会費	620,000	860,000	△ 240,000	
像制作委託費	600,000	1,200,000	△ 600,000	26' は1体を予定
発送等委託費	1,600,000	1,400,000	200,000	
他団体寄付金	1,880,000	1,850,000	30,000	
役員報酬	400,000	280,000	120,000	
給料手当	3,980,000	3,926,000	54,000	
福利厚生費	580,000	540,000	40,000	
旅費交通費	2,650,000	2,650,000	0	
通信運搬費	420,000	440,000	△ 20,000	
減価償却費	174,024	178,094	△ 4,070	
消耗品費	430,000	520,000	△ 90,000	
印刷製本費	2,510,000	2,580,000	△ 70,000	
会議費	150,000	260,000	△ 110,000	
光熱水料費	100,000	120,000	△ 20,000	
賃借料	1,620,000	1,620,000	0	
諸謝金	470,000	120,000	350,000	
雑支出	100,000	100,000	0	
退職手当引当資産繰入支出	296,000	155,000	141,000	
経常費用計	18,580,024	18,799,094	△ 219,070	
評価損益等調整前経常増減	△ 1,440,024	△ 1,409,094	△ 30,930	
基本財産評価損益等	396,000	504,000	△ 108,000	
特定資産評価損益等	0	0	0	
当期経常増減額	△ 1,044,024	△ 905,094	△ 138,930	
2 経常外増減の部				
(1) 経常外収益	0	0	0	
特攻隊建立基金取崩	0	0	0	
投資活動収益計	0	0	0	
(2) 経常外費用	0	0	0	
特定資産への振替	0	0	0	
経常外費用計	0	0	0	
当期経常外増減額	0	0	0	
当期一般正味財産増減額	△ 1,044,024	△ 905,094	△ 138,930	
一般正味財産期首残高	16,801,349	16,139,063	662,286	25' 決算見込額計上
一般正味財産期末残高	15,757,325	16,801,349	△ 1,044,024	26' 決算見込額計上
II 指定正味財産増減の部	0	0	0	
一般正味財産から振替	0	3,600,000	△ 3,600,000	
当期指定正味財産増減額	0	3,600,000	△ 3,600,000	
指定正味財産期首残高	278,000,000	274,400,000	3,600,000	
指定正味財産期末残高	278,000,000	278,000,000	0	
III 正味財産期末残高	293,757,325	294,801,349	△ 1,044,024	

世田谷山観音寺特攻平和観音月例法要参列の皆様へ

(公財)特攻隊戦没者慰霊顕彰会



世田谷山観音寺・特攻平和観音月例法要参列の葉



世田谷山観音寺・特攻平和観音月例法要に参列される際、下記事項を参考に月例法要の意義・参列要領・服装・立ち振る舞い等に留意され、英霊に対する礼節を以って御参り下さい。

由来：特攻平和観音は、昭和28年7月12日に護国寺から世田谷山観音寺に遷座、先代の太田陸賢和尚は祈願を目的とする観音堂とは別に、戦没者の冥福を祈る特攻観音堂を別途建立すべきと決心、譲り受けた旧華頂宮邸の持仏堂を移築、昭和30年5月24日に遷化された。工事は現山主・太田賢照和尚に引き継がれ昭和31年5月18日に目出度く落慶法要が営まれた。これを機に爾後毎月18日が月例法要の日となり観音寺主催による法要が今日に続いている。特攻平和観音のお姿は、法隆寺夢違観音を模しており（向かって右が陸軍・左が海軍の特攻戦死者の霊名録が像の胎内に納められている）厨子の扉には宮内庁から許され戴いた菊の御紋章が輝いている。

参拝 午後2時より（約30分位）

* 実施場所 世田谷山観音寺・特攻平和観音堂内

- ①観音堂入口にある参拝記帳所で署名をする。
- ②お経料として、各自「御宝前(ごほうぜん)」と書いた封筒に記名をして、千円を包み、堂内壇上左端へ御供えする。
- ③賢照和尚に合わせて一緒に読経する（初参列の方は、経文の用意がありますのでお声掛け下さい） 読経後、暫し瞑目合掌して、静かに在りし日の特攻隊員の方々の面影を偲び、感謝を捧げ、魂の安寧を祈る。
- ④賢照和尚から特攻隊・観音寺の由来等についての説教がある場合は拝聴する。

直会 法要後～午後3時半頃迄

- * 場所は境内にある観音寺本坊（旧代官屋敷）で、参拝参加者のうち希望者が参加する。
- * 机を囲んで座り、お寺が用意して下さったお菓子や飲み物を頂きながら、懇談する。直会参加者は誰でも月例参拝に参列したきっかけや感想等を述べ、特攻体験者の方々から貴重な体験談を伺う等、参加者が英霊を偲ぶ場です。どなたでも参加できますので、18日参拝の際には、是非ともご参加ください。

《お問い合わせ》

世田谷山観音寺（寺務所） 03-3410-8811

特攻隊戦没者慰霊顕彰会（事務局）03-5213-4594

【 現地で何か判らない事がありましたら顕彰会会員(バッジ着用)に遠慮なくお尋ね下さい 】

事務局からの報告等

寄附者御芳名(敬称略)

(平成25年10月1日～12月31日)

(単位千円)

- 一〇 古明地正雄 一〇 山根 秋男
一〇 甘利 祐三 一〇 山崎 悟
九 宇井 忠一 七 廿日出昭信
五 宇上 明夫 三 吉川 潜
三 中村 好之 二 高尾 昇三
二 丸山喜久市 二 茂木 明治
二 宮崎 信寿 二 鈴木 馨
二 徳田 孝二 一 上田 浩寛
御芳志誠に有り難うございました。

新入会員名簿(敬称略)

(平成25年10月1日～12月31日)

- 千葉県 御手洗朋子
東京都 前田 康夫 石田 義之
神奈川県 小林 恵子
新潟県 浅野 俊範 中村 五郎
福岡県 近藤 健 岡山県
桐 茂 山口県
徳島県
福岡県
佐賀県
熊本県
北海道 高橋 清 (25・2・7)
北海道人中三郎
栃木県 片山 一郎 (24・8・11)
群馬県 鈴木 育造

会員訂報(敬称略)

謹んで哀悼の意を捧げます。

会員ご入会のご案内

当顕彰会は、先の大戦において、祖国の安泰を願ひ、家族や大切な人たちを案じつつ、自らの命を犠牲にして、それらを護ろうとした若い特攻隊員たちの御霊を慰霊し、感謝することを目的とする団体であります。

私達は、彼らからその精神を学び、自分たちの生き方を考え、より良い社会の実現に寄与したいと活動を続けております。ご賛同の上、ご入会くださるようお願い申し上げます。

○当顕彰会の沿革

昭和34年5月前身の特攻平和観音奉賛会が全国組織化
昭和57年6月特攻隊慰霊顕彰会発足

- 初代会長 竹田 恒徳 元宮様
二代会長 瀬島 龍三 氏
平成5年11月財団法人認可
三代会長 山本 卓真 氏
平成23年1月公益財団法人認定
現理事長 杉山 蕃 氏

○当顕彰会の主な事業

- ・特攻隊戦没者の慰霊顕彰
・広報誌等の発刊
・講演会等の開催その他

○年会費

- ・一般会員 3000円
・学生会員 1000円

〒102-0073
東京都千代田区九段北3-1-1
靖国神社遊就館内 公益財団法人
特攻隊戦没者慰霊顕彰会事務局
電話 03-52213145
FAX 03-52213145

ご投稿についてのご案内

ご投稿に際しましては、次の点にご留意くださるようお願いいたします。

- 1 原稿は、手書き、ワープロ・パソコン作成のいずれでも結構ですが、なるべく縦書き、1段17字詰めをお願いします。
2 記事の取捨選択、紙面の都合等による一部割愛、修文等については、当協会事務局にお任せ願います。
3 慰霊祭、行事等の写真がありましたら、なるべく添付してください。
4 原稿、写真等は、原則としてお返しいたしません、必要の場合、その旨お書き添えください。
5 会報・機関誌、投稿記事等の送付先は、左記の当顕彰会事務局宛とさせていただきます。

記

〒102-0073
東京都千代田区九段北3-1-1
靖国神社遊就館内 公益財団法人
特攻隊戦没者慰霊顕彰会事務局
電話 03-52213145
FAX 03-52213145